
HERO

藍村 霞輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HERO

【Nコード】

N2015T

【作者名】

藍村 霞輔

【あらすじ】

—— 君を殺して 僕は“勇者”になる ——

それは、約束された“勇者”と“魔王”の物語。
その意味を、結末を、知るもの達は重く口を閉ざす……
ダークファンタジー長編小説。

登場人物紹介（前書き）

最新章までの登場人物を紹介。随時更新されます。

登場人物紹介

第一章 旅立の暁

++ フィオ・ノークス ∷ Fio Norks ++
古の託宣によつて選ばれた“勇者”である少年。18歳。
黒髪紫眼。外見の割りに身体能力が非常に高く、他を圧倒する戦闘センスを持つ。

++ デインガード・ヴァレン ∷ Dineguard Varren ++

フィオの幼馴染の青年。23歳。

焦げ茶の短髪に紅眼。無愛想で口が悪く、すぐに周りと喧嘩になる。

++ ローエン・セラ ∷ Rowen Sera ++

シルメリア正教会所属の修道士。28歳。

金髪碧眼。“勇者”の支援をすべくその旅に同行する。少々気弱。

第二章 風の試練

++ ユーリー・カイザード ∷ Julie Caesard ++

ライレキアの大貴族カイザード公爵家の少女。18歳。

金髪青眼。魔道の契約を結ぶためフィオ一行に同行する。

第三章 南方連合

++ アイク ∴ Ike ++

エスラータの町で荒くれ達を取り纏めるレンジャーの青年。20代前半。

赤髪赤眼。ひょんなことからフィオラにある提案を持ちかけてくる。

1-1:プロローグ 少年は暁に発つ

山の向こうが白んできた。

宵闇の黒い帳が剥がされた空は濃紺と朝焼けの赤とが混ざり、紫がかっていく。

次第に赤みの薄らいでいく空はやがて本来の青い姿を取り戻すだろう。

風は優しく、雲は一つも無い。

今日は良い天気になるだろう。

フィオは空を仰ぎ見ながら、幸先のいい出立になりそうだと思った。

今日、フィオは故郷の村から旅立つ。

慣れ親しんだ場所を離れ、未だ見ぬ世界を旅して回らなくてはならないのだ。

フィオは視線を落とし、膝を着いて身を屈めた——足元の二つの墓と向かい合うように。

それは彼の両親の墓だった。

フィオのまだあどけなさの残る顔に微かに陰が差す。

「本当に、オレなんかに来るかな……」

三年前、母シビラが死んだ時も決して涙を見せない程気丈なフィオだったが、この時ばかりは思わず弱音が零れた。

だがそれも詮無いことである。

それ程までにこの度フィオに課せられた使命は、運命は、過酷と言うに余りあるものなのだ。

「……ううん、そんなこと言ってられないよね。やるしかないんだ。

これはオレにしか出来ないことなんだから」

フィオは弱気な考えを振り払うようにぶんぶん頭を振ると、^{かぶり}気持ちを新たに両親に顔を向けた。

と――

「おい、フィオー！」

出し抜けに響いた呼び声にフィオは立ち上がって振り返る。

見れば焦茶色の髪 of 青年がこちらへと駆け寄ってくるところだった。

幼なじみのディンガードだ。

「小母さん達に挨拶済んだか？ 教会の連中がもう準備出来たって」

「うん、今行くよ」

フィオは紫色の双眸を細めディンガードにそう言って笑いかける。

そして別れを惜しむように、もう一度両親の墓を振り返った。

「行ってくるよ、母さん、父さん」

一筋の眩い光が山向こうから差し込み、フィオの夜のような黒髪を照らす。

世界は黎明の時を迎えた。

1 - 2 : 聖者の託宣と約束の物語

古の文明を色濃く残す悠久の世界シルメリア。

その二つある大陸のうちの一つ、ラトラディク大陸中央に位置するライレキア王国の辺境の地にあるレカンという村に、その少年はいた。

名をフィオ・ノークスという。

齢十八。シルメリアでは珍しい黒い髪に紫の瞳という容貌を持つ、一見はごく普通の少年だった。

だがその少年こそが、教会が血眼になって捜していた人物なのである。

今、世界を蹂躪せんとする未曾有の脅威に対抗する術として——
時はシルメリア暦二〇三五年。

ある王国が一夜にして壊滅したことから全ては始まった。

*

その日、ローエン・ゼラは酷く緊張していた。

それもその筈、待ちに待った“託宣の勇者”がもうじきここに来てくるのだ。

その期待感と、そして自身に課せられている使命から来る重圧感とが今、ローエンの神経を苛んでいた。

胸の前で固く両手を組んでいなければ足が震えてしまいそうであ

る。

そんな年若の修道士に、老輩たる修道士は苦笑を交えながらやさしく肩を叩いてやった。

「ローエン、そんなに緊張するな。もつと堂々としている」

「は、はい……いえでも、何と言いますか……しっかりしようとは思うのですけれど」

元来気の弱い性格である。それは自分でもよく解かっていた。自分の体たらくを情けないと思う反面、今すぐこの場を逃げ出してしまいたいと思うのもまた事実で。

勿論自分の使命についてはとても光栄なことだし、栄誉なことだと思っている。

使命を全うしなければという義務感や責任感も大いに感じているのだが、その時に直面するとなるとまた臆病心が顔を出すのだ。

……ああでも、これではいけない。本当にしっかりしなければ、
“勇者” 殿にすら笑われてしまう。

ローエンは何とか気分の転換を図ろうと、老輩修道士に話題を投げ掛けた。

「それにしても、託宣の“勇者” 殿とは一体どのような方なのでしょうね？」

「実際に会った司祭の話では、まだほんの少年だということだ。年は十八だったかな。お前とそう変わらない年齢だな」

「十八なら随分と下ですよ。十も違います。そんなお若い方で大丈夫なのでしょうか？」

「うむ。しかし魔物を圧倒する剣の腕は凄まじいものだったそうだ。司祭もその腕を見て最終的な決断に至ったと言っていた」

「そんなにすごいのですか」

「らしいぞ。まあ、神々もただの少年に使命を下すような真似はしないということだろう。ノアの託宣の信憑性は疑うべくもなくなつたな」

「そうですね……」

ノアの託宣——それは、およそ千二百年前に実在した人物、聖者ノアが神より預かった言葉を記した預言書である。

かつては世界の運命を記した書として重要視されていたが、時代の変遷と共にその価値は次第に薄れていった。

というのもこのシルメリアは千年前の“大革命戦争”以来、長きに亘り平和な時間を享受してきた為神の言葉を強く必要としてこなかったのである。

故にこれまで聖遺物として大切に保管されてきたものの、現代においてその内容に関して触れられることは殆ど無かったのだ。

しかしカイニード王国が一夜にして滅ばされたあの事件をきっかけに、改めてその内容が見直されることとなった。

大昔に記されたノアの託宣は確かに、遙か未来に起きたこの度の事件を“予言”していたからだ。

『——これより遙か彼方の時代、緩やかな時の流れの果てに、再び神々の運命は我らが大地に降り立たん。

新たな哀しみが世界を駆け、暗雲は喜びの光を遮る。

世に魔が蔓延り、恐慄は心に住処を築くだろう。

悲しみは西の大地にて、悲愴を抱いて生まれ出ずる。

宵闇よりもなお暗き漆黒を纏う其の者は、あらゆるものを憎悪し否定する。

世の背徳篤き者、其は“魔の王”と称されるもの。

彼の者、世界を黒き闇へと導かん。

その対極、世界は一つの希望を得るだろう。

喜びは東の大地にて、悲壮を持って生まれ出ずる。

黎明と黄昏の彩を写す其の者は、あらゆるものを許容し肯定する。神々の祝福厚き者、其は“勇ましき者”と呼ばれるもの。

彼の者、白き闇の果てに世界を安寧へと導かん。——』

それは、世界を滅ぼす“魔の王”と、それを食い止める“勇まし

き者”の預言。

遙か古の時代に約束された、“魔王”と“勇者”の物語――。始まりは三ヶ月前、カミューア大陸西部にあるカイニードという国が大量の魔物に襲撃され、一夜にして壊滅した事件に端を発する。その日以来これまで鳴りをひそめていた魔物達の活動が急激に活発になり、各地でその被害が頻発するようになった。

それは震源地たるカイニード王国を中心に波及するように拡大していき、影響は海を越えてラトラディク全土にも飛び火した。

そしてそれと殆ど時を同じくして、こんな噂が流れ出した。

『“魔族”と名乗る者達が“魔の王”を擁し、世界を滅ぼさんとしている』と。

まるで子供に語る御伽噺のようだが、しかし現に人間世界は今、魔物の襲撃を受け滅亡の危機に晒されている。

更には聖者ノアの託宣という預言の存在がそれを確証付けているのだ。

世界中が恐慌状態に陥るのも無理のない話である。

そこで人々が救いの存在を求めたのもまた、ごく自然な流れと言えよう。

その救いが、漸く今、世界に降り立とうとしている。

「一同静粛に。“勇者”殿がご到着なされた」

司祭の言葉に場が一瞬でしんと静まり返った。

ローエンも大きく跳ね上がった心臓を必死に堪えながら、その人の登場を待つ。

果たして、重々しく開いた扉の向こうから現れたのは、修道士に誘われる一人の少年の姿だった。

ぱっと見はごくごく普通の、どこにでもいそうな十代の若者といった風体である。

均整の取れた顔立ちはまだ熟れきっていない少年のものだし、体格も比較的細身で屈強そうとは言い難い。

導かれながら中央の祭壇へと歩を進める足取りもどこか固く、こ

の雰囲気緊張しているのが見て取れた。

そこからは伝説に謳われる“勇者”というには少々頼りなさげな印象ばかりを感じたが、しかしその一方でローエンは少年を見て思わず眼を見張った。

黎明時の夜明け空のように淡い紫色の双眸に、黄昏時の宵入り空を写したような漆黒の髪。

それはまさしく、託宣に読まれた“勇ましき者”の特徴そのものであった。

シルメリアにおいて黒髪は砂漠の民と呼ばれるゾディア族など西のカミューア大陸のごく一部の地域でしか見られない上、紫色の眼というのは更に希少性が高い。世界広しと言えどその二つを併せ持つ人間はそういまい。

加えて彼は託宣にある通り、『東の大地』の出身——ここラトラデイク大陸は東側に位置するし、彼の生地であるレカン村はライレキア王国の東部にあるのだ——だ。

そして極め付けが彼の名前である。

フィオというのはシルメリア十二神のうちの石柱、戦勇双神のうちの片割れである勇気神の名なのだ。

神々の名を子供に付ける風習はシルメリアでは比較的ポピュラーな命名法——例えばローエンの名も正義神オーから取って付けられたものだ——だが、これだけの要素を兼ね備えた少年が更に名前まで勇神の名を冠しているなど、偶然とはとてもじゃないが思えない。ノアの託宣の見直しが行われてからというもの、これらの符号に合致する人間をそれこそ大陸中を洗いざらい捜した訳だが、彼ほど条件にぴったり沿う者は一人としていなかった。

いや、それ以前に、合致する人間が存在するなどとは思われていなかったのが現実なのだ。

というのも、期待と確信が必ずしも等しいとは限らない。半ば諦め混じりに一縷の希望に縋ったというのが正しい所なのである。

だから彼の存在が明らかとなった時、教会は驚嘆と歓喜に包まれ

た。

その時のことをローエンもよく覚えている。

一報が入った時は飛び上がるほど驚いたし、同時に歓喜に身が震えた。

これは決して偶然の一致なのではない。間違いなくこれは絶望に對抗すべく神が人間に賜うた“希望”だ。

そして“この”使命を賜った時は血の気が引くほど驚愕したし、同時にその重圧に身震いしたものだ。

「聖者の託宣に読まれし者、レファル・ノークスとシビラ・ノークスの子、フィオ・ノークス」

司祭の朗とした声が聖堂内に響く。

祭壇を挟んで向かい合った少年は、それまでの緊張の様子を感じさせないはつきりとした声ではいと応えた。

「創造神ロージェの名において、汝に神命を使わす。謹んで受け取られよ」

脇に控えるローエンは、固唾を吞んでそれを見守る。

「汝に下されし神命は託宣に指し示されるように“勇者”として破壊の権化たる“魔王”を討ち滅ぼすことである。そして絶望に満たされんとする世界を安寧へと導くことが汝の使命である」

「はい」

「しかし凶悪な魔の物を統べる“魔王”は比類なき力の持ち主である。故に汝は先駆けて世界各地へと赴き、散在する五大精霊と呼ばれる精霊の長に会い、その力を借りて見事その大役を果たされよ」

「五大精霊、ですか？」

思わず聞き返していた少年に、ローエンは内心ぎょつとした。

……ここに来る前に、全部説明されていなかったのだろうか？

横目でそつと壇上の司祭を見ると、司祭は一つ咳払いをしてから説明を始めた。

ああ、あの様子だと後で担当者は怠慢を怒られるんだろうな……

ローエンは心の中で少年を連れてきた担当の修道士に思わず合掌

した。

「……五大精霊とは、地、水、火、風、雷の五つの元素を司る精霊のことである。それぞれの精霊を統括する精霊の長に助力を請い、その力を借り受けることがまず汝がすべきことのひとつと言えよう。彼の者達の助力なくば強大な力を有する“魔王”に対抗することは出来ないだろう」

「その精霊の長というのは一体どこにいますのでしょうか？」

「地精の長は南の森の奥深く、水精の長は西の清らかなる湖の底に、風精の長は東の荒寥たる原野の果て、雷精の長は北の氷雪に閉ざされた山脈の頂きにそれぞれ社を持つと言われている」

「あの、火精は？」

「火精の長の社だけはその所在が知られていない。伝承では宿る場所を持たず、シルメリア中を駆け回っていると言われているが」

「それではどうやって捜せばいいのでしょうか？」

「他の四大の精霊に関しては教会から供となる者を付ける故、安心されよ。火精の長の所在もまた、世界を巡る中でおのずと知れることだろう」

「はあ」

ローエンは冷や汗が止まらなかった。

……“勇者”殿、先程までの緊張感は一切どこへ行ってしまったのですか。風体がすっかり田舎の少年丸出しですよ。

というか一応託宣の授与という神聖な儀式なのだから、せめて気の無い返事をするのだけはやめてほしいです……！

今人の目がなかったらローエンは両手で顔を覆ってしまいたかった。

少年の醜態をまるで自分のことのように感じながら、しかし崩れ落ちたい衝動をぐつと堪えてローエンは事の成り行きを静かに見守り続けた。

「……まあ、詳しいことはその従者に直接聞かれるが宜しかろう。勇氣の神の名を冠する者、レカンのフィオ・ノークス、今この時よ

り汝は託宣の“勇者”としての使命に殉ずるものとする。汝が世に安寧を齎することを切に願う」

「はい。“勇者”の使命、謹んでお受けいたします」

うむ、と一つ頷くと、司祭の視線がこちらを向いたのでローエンは思わずびくりと肩を震わせてしまった。

「ローエン・ゼラ、出なさい」

「はっ、はい！」

射抜くような司祭の目にびくつきながらローエンは祭壇の前へと歩み出た。

「この者はローエン。旅の供としてお付けする。ローエン、そなたは“勇者”の旅に付き従い、その手足となって“勇者”を支えよ」

「畏まりました。偉大なる創造神ロージエと正義神オーの名の下に、この身に代えてもその使命をお支えすることを誓います」

緊張を押し殺し、ローエンは淀みなくそう言っうて頭を垂うれた。

「善処を期待する。――では、これにて託宣授与の儀式を終わりとする。託宣の“勇者”フィオ・ノークスに十二神の加護のあらんことを」

1 - 3 : 三者の旅立ち

聖堂を一步出た瞬間、ローエンは肺に溜まっていた重苦しい空気を一気に吐き出した。

「っはあああああ、緊張したああ……」

壁に手をつきながら思い切り脱力する。

思わず膝まで着いてしまいそうになるが、すぐ傍に“勇者”がいることを思い出し慌てて姿勢を正した。

「す、すみません！　ずっと緊張を我慢していたもので……！」

あわあわと顔を真つ赤にしながら取り繕おうとしたローエンだが、対する“勇者”の少年は朗らかな笑みをローエンに向けてきた。

「オレも緊張してたから解かりますよ。ああいう雰囲気ってほんと慣れなくて。はあ、疲れたー」

そう言つと、彼まで壁に寄り掛かつて大きく息を吐きだした。

そして、疲れましたねーと横目で同意を求めてくる少年に、ローエンは気負っていた心が少し軽くなるのが判った。

「あの、“勇者”殿……」

「あ、オレのことはフィオでいいですよ。何かそう呼ばれるのちょっと恥ずかしいし」

「ではフィオ殿と」

「いや、あの、敬語とかも無くて大丈夫ですよ。普通にフィオって呼び捨ててもらえれば」

「しかし託宣の“勇者”にそれは失礼では……」

「いや、別に？　ていうか、逆に居たたまれなくなるから出来れば普通に話してもらえると、オレとしてもやりやすいんだけど」

「えっ？　あ、そうですか……では、フィオさんと呼びますね」

「うーん、まあいいかな。そんなに気にしなくてもいいのに」

「いえ、これは私の癖でして……砕けた話し方というのがどうにも昔から苦手なんです」

「そうなんだ。えーと、ローエンさんだっけ？　ローエンさんは教会暮らしが長いの？」

「ええ、親が教会の人間なので、物心ついた時には既に教会にいました」

「教会の人って巡礼とかで色々な場所に行くって聞いたんだけど、ローエンも色々な場所を旅したことあるの？」

「ええ。それもあつて今回の“勇者”の旅に同行することになったんです」

「そっか。それはありがたいな。オレ達村の外に殆ど出たこと無くて地理とか全然わかんないから、どうするんだろうって言ってたんだ」

「道案内くらいなら任せてください。……まあ、そのぐらいしかお役に立てそうもありませんけど」

頼りにしてるね、と屈託なく笑うフィオに釣られるようにローエンも笑顔を浮かべた。

フィオの言葉に若干の引つ掛かりを覚えたものの、その疑問は笑っているうちに霧散してしまった。

「よし、緊張疲れもちよつと取れたし、そろそろ行こうか」

ん、と大きく伸びをしながら壁に預けていた背を離し、フィオが振り返った。

ローエンも佇まいを直し、頷きかける。

「表に馬や旅に必要な荷を用意させてあります。徒で世界を巡るの^{かち}は大変ですからね。フィオさん、乗馬の経験は？」

「あ、無いかも。まあ、オレは多分大丈夫。けど……」

「けど？」

聖堂から建物の外へ通じる短い通路を歩きながらそんなやり取りを交わす。

語尾を引きずるようなフィオの言葉に、先程と同じような引っかけを感じたローエンはそれを追究しようとした。

が、その答えは、教会の大扉を開け外に出たところに待っていた。
「遅え！！！」

出し抜けに浴びせかけられた怒声にローエンはびくりと肩を震わせた。

見れば、丁度大扉の横手の壁に腕組みしながら凭れかかり、苛立たしげにこちらを睨む青年の姿があった。

さらりとした質感の焦げ茶の短髪の影響から、紅玉のごとき鮮やかな色を湛えた切れ長の双眸が覗いている。

身長はローエンよりも幾分高いだろうか。瘦躯とまではいかないが、然程がっちりした体型でも無い。ごくありふれた成人男性の体格と言って差し支えないだろう。

それなりに見栄えのしそうな顔立ちは、しかし不機嫌そうにしかめられているせいですっかり台無しとなっている。

二十代半ば頃と思われるその青年はつかつかとこちらへ歩み寄ってくる。開口一番怒声を張り上げた。

「宣言一つくれてやんのにどんだけ時間かんだよ！ こっちは寒空の下半刻近くも待ちぼうけ食わされてんだぞ！ 中入れるっても関係者以外立ち入り禁止だとか言って全然聞きやがらねえし、どうなってるんだ！！」

「まあまあ、デイン。そんなに怒らないで。待たせてごめんってば」
慌てて青年を宥めに掛かるフィオだが、青年はフィオを押しつけてローエンに詰め寄ってきた。

「お前にや文句言ってるねえ。おい、その教会関係者！」

「はいいつ！？ わつ、私ですか！！？」

「てめえだてめえ！ どーなってるんだって聞いてんだよ！！」

「そそそんなこと言われましても私には何が何やら……！！」

「デイン！ 八つ当たりしないの！」

ローエンの胸倉を掴んで吊り上げんばかりの勢いの青年を、フィ

オが鋭く制止する。

青年は胡乱な目つきでフィオを見下ろしていたが、ばつが悪くなったのかチツと舌打ちすると大人しくローエンから手を離れた。

ローエンは混乱する思考のまま激しく動悸する胸を必死に押さえていた。

な、何なのだろう、この青年は……。

教会という組織の中で育てられた、言わば箱入りであるローエンの人生において、こんなに柄の悪い人間に関わったことなど一度だつて無い。

未知とも言える人種の存在に戦慄していると、それを取り繕うようにフィオが苦笑を浮かべ弁明してきた。

「ごめんね、ローエン。悪い奴じゃないんだ。ちょっと短気だけど、根はいい奴なんだよ」

「こ、この方は…… フィオさんのお知り合い、ですか……？」

「うん。オレの幼馴染で、ディンガードっていうんだ。今回の旅にも同行することになってる」

そう言つてフィオが青年を指す。

しかしディンガードと呼ばれた青年はこちらをねめつけるばかりで、うんともすんとも言わない。

フィオの言葉に感じていた引つ掛かりの正体は、恐らくこの青年の存在だ。

てつきりフィオは一人でここに来たものと思っていたから、まさか自分以外の同行者がいるとは思わなかったのだ。

「ディン、こっちは教会の人でローエンていつて、旅の道案内をしてくれるんだつて。ほら、挨拶」

「……。」

「あ、あの、ローエン・ゼラと申します……どうぞ、宜しく願いますね……」

びくびくと怯えながらも精一杯の勇気を振り絞り手を差し出す。惘然とした表情を崩さないディンガードに痺れを切らしたフィオ

が咎めると、彼は漸く、不承不承といった体だがその手を握り返してきた。

「……ディンガード・ヴァレンだ」

「ディンガードさん……良い名をお持ちですね。ご両親に祝福されたのがよく判ります」

ローエンとしては少しでも歩み寄ろうと思って言ったことなのだが、何故かディンガードは一瞬表情を曇らせると振り払うように握っていた手を解き、そっぽを向いてしまった。

何か悪いことでも言ってしまっただろうかと心配になったローエンだが、フィオが会話を切り出したことでそれは有耶無耶になってしまった。

「ローエン、最初はどこへ向かうの？ オレ達ほんとにどこに何があるとか知らなくてさ」

「あつ、はい。まずは東にある“風の遺跡”を目指そうと思います」

「“風の遺跡”？」

「ええ。ここからならそこが一番近いですから。まずはセレメシオ地方にあるセルンの町を目指し、そこから荒野を越えた先にある遺跡を目指すことになります」

「なるほど。道案内よろしく！」

地名を言われた所で全く理解には至らなかったらしい。

あつさりと地理を投げ出したフィオに、ローエンは思わず苦笑を零した。

「フィオ様、ローエン様、馬の準備が整いました」

いつの間に関れたのか、一人の修道士が出立の準備が出来たことを告げに来た。

気配に全く気付かなかったことを内心恥じながら、ローエンはその修道士に伝令の礼を述べ、フィオ達を外門へと誘った。

教会の外門をくぐるとそこには荷を積んだ馬が三頭、別の修道士に手綱を引かれながら並んでいた。

「ご苦労様です」

修道士達に労いの言葉を掛けると、彼らは一様に礼をもって返してきた。

と、その内の一人がそろそろと進み出、フィオに一振りの剣を差し出した。

「ご所望のものです。こちらで大丈夫でしょうか」

「ありがとうございます。助かります」

フィオはそれを受け取ると少し皆から距離をとり、鞘から剣を引き抜いて軽く振り始めた。

どうやら具合を確かめているらしい。数回空を切った後よしと呟いて刃を鞘に収め、剣帯を腰に巻きつけた。

「剣など頼んでいたのですか？」

てつきりフィオは自分で得物を持っているのだと思っていたが、どうやら違ったらしい。

フィオは照れくさそうに頭の裏を掻くと苦笑して答えた。

「ちゃんとした武器って持ってなくて。ほら、剣とか槍って大きい町でしか売ってないし、高いじゃない」

「それでは今まで一体何で魔物と戦っていたんです？ 確か、村にいた頃はフィオさんが村周辺の魔物を退治していたと伺ってますが

……」

「うーんと、鋤^{くわ}とか、樵^{きしじ}用の斧とか、草刈鎌とか、その辺にあるもので適当に……」

その答えにはさすがにローエンもギョツとした。

殆ど農具ではないか。そんなものでこれまで魔物の脅威を打ち払っていたというのか。

信じられないといった目でフィオを見てみると、フィオはねえと同意を求めるようにデインガードを見た。

デインガードは相変わらずの仏頂面で、しかしフィオに同意するようにつんつんと頷いて見せた。

「うち貧乏だしな。んなもん買っ余裕なんてねえし、しょうがねえからその辺にあるもんで代用してたんだよ。つか、この辺の村じゃ

大体そうだぞ。そもそも武器なんて戦闘以外に用途ねえから持つててもあんま意味ねえしな」

「それでよく凌げてきましたね……」

「まあ、そんなに強くなかったからね。でもさすがにこれからは違うだろ？ だからちゃんとしたの持ってた方がいいかなって思っ、教会の人に頼んでおいたんだ」

別の修道士がデインガードにも槍を手渡す。

なるほど……とローエンも納得しかけたが、しかしすぐにそれを打ち消した。

今まで剣も槍も持っていなかったということは、それらを扱うのはこれが初めてということだ。

これから壮絶な戦いの旅が始まるというのにそれで大丈夫なのかと憂慮する気持ちがふつふつと沸いてきたが、そんなローエンとは対照的にフィオやデインガードの様子は至って呑気なものだった。

「そっぴやデイン、馬乗るの初めてでしょ？ 乗れるの？」

「馬つつたつて要はロバのどっかい版だろ？ よゆうだな。お前こそちつちえんだから精々振り回されんなよ？」

「自分が身長あるからって人をチビ呼ばわりしないでくれる？ オレは平均ですー」

「平均でもちつちええもんはちつちええだろうが。悔しかったら俺よりでっかくなつてから言うんだな」

「うっわ言つたな！？ 絶対いつか追い抜かしてやるからな！ 覚悟してるよ！」

「はっ、出来るもんならやってみな。ま、無理だろうがな！」

ぐぬぬと悔しがるフィオと、それを勝ち誇ったように見下ろすデインガード。

まるで兄弟喧嘩のようだとローエンは思ったが、そんなのんびり構えていられる状況ではないことに気付き、ぶんぶんと頭を振った。「お二人とも、喧嘩はその辺にしてそろそろ参りましょう。今は一刻も無駄に出来る状況ではありません」

「あつ、そうだね！ ごめんごめん。ついいつもの調子で」

あはは、と笑って誤魔化そうとするフィオに反し、ディンガードの方は再び不機嫌そうな表情に戻ってしまう。

あまり好感を持たれていないんだろうな、と僅かに気落ちしつつも、ローエンは二人がそれぞれの馬に跨ったのを見届けると自分もそれに乗り、彼らを導くように先頭に立って歩き出した。

1 - 4 : 旅の始まり

秋の空は深く、高い。

目の覚めるような青の中を真っ白な雲がゆったりと揺蕩う。

心地の良い涼風が頬を撫でる。夏の突き刺さる程の日差しはすっかりとその勢いを失い、優しく緑の大地を照らしていた。

すいすいと飛び交う蜻蛉の姿を横目で追いながら、ローエンは心の中のどかなあと呟いた。

のんびりとした速度で広原の道を歩いていることも相俟って、実に穏やかな時間が流れていた。

「のどかなだねー」

一瞬心の声が漏れたのかと思いきりとしたが、すぐにそれがフィオのものだと気付きローエンはホッとした。

フィオは馬上で器用に伸びをしながらローエンに話しかけてきた。「天気もいいし、こんなにのんびりしていると今が大変な時だって忘れちゃうね。この辺の草むらの上で昼寝とかしたら気持ちよさそう」確かに、これだけ穏やかな空の下で眠ったらさぞ心地が良いだろう。

しかしそれはさすがに無用心というものだ。

ローエンは苦笑を交えながら言った。

「こんなところで寝ていたら魔物の格好の餌食になってしまいますよ。町からも遠いですし、野盗の類が出るかも知れませんしね」

「そっか、残念」

口を少し尖らせて言うその口ぶりは、歳よりも若干幼い印象を抱かせた。

もう少し垢抜けた少年ならばもっと大人びた言動を取るものだが、フィオの言動は田舎の純朴な少年らしい素直なものだ。

そんな風に感じたローエンの心に、再び小さな不安が芽生えた。
(本当にこの方で大丈夫なんだろうか……どう頑張ってもどこにでもいそうな子供にしか見えないんだけど)

ノアの託宣を疑う訳ではないが、しかしどう考えても彼が世界の危機を救える程の大戦士には思えないのだ。

傍に立って初めて知ったのだが、この少年は遠目で見た時よりもずっと小柄だし腕の細さだってローエンに負けていない。

今も楽しみに景色を眺めるその横顔は、危機感なんて言葉とは全く無縁の呑気なものにしか見えなかった。

後ろを付いてくるディンガードの方がよっぽど眼光が鋭いくらいだ。

……いや、彼の場合ひょっとしたら単に目つきが悪いただけかもしれないが。

「あの、ディンガードさん……大丈夫ですか？」

心配して後ろを振り返ると、硬く手綱を握り締めながら馬の後頭部を睨みつけているディンガードの姿が目に入った。

その表情は真剣そのものだ。

「ディンガードさん？」

「うるせえ、邪魔だ。話しかけんな」

にべもなくそう言い放たれ、ローエンは思わずしゅんとしてしまふ。

するとそれを取り繕うようにフィオが間に入ってきた。

「集中しないと振り落とされちゃうもんね、ディン」

「うつせえよ！ この馬鹿馬が人のこと馬鹿にしゃがるから……うつおっ……！」

まるでディンガードの言葉に反応するかのように馬が嘶きを上げ、前足を上げて身を反らせる。

その反動でディンガードは危うく振り落とされそうになり、必死に馬の首にしがみ付いた。

「このっ、危ねえだろうが！」

思わず悪態をつくとも馬はブルルン、と息を吐き、首を回してデインガードを仰ぎ見てきた。

それがよつぽどふてぶてしい顔に見えたらしい。ぎりぎりと齒軋りしたかと思うとデインガードが馬の顎を掴んで怒鳴り声を上げた。

「こんのクソ馬……！ 誰が能無しだコラア！ 焼いて食うぞ！」
「デイン、馬と本気で喧嘩するなよ……」

さすがのフィオも呆れ気味である。

ローエンも引きつった笑みを浮かべながらそれを見ていた。

（ああ、のどかだ……）

本当に、今まさに世界が危機に瀕しているなんて思えないくらい
のどかな光景である。

しかし現実はずっと深刻だ。

それを思うと、ローエンの心は沈んだ。

「ローエン？」

ローエンの表情の変化に気付いたのだろう。フィオが心配そうに
こちらを見てくる。

慌ててローエンは視線を上げた。

「あつ、いえ、すみません……何だか本当に、こうしていると平和
そのものにしか思えないのに、それでも少しずつ世界が滅びに向か
っていると思うと、悲しくて……」

「うん、そうだね……」

フィオの表情にも僅かに影が差す。

少年の顔が不思議と大人びたものに変わったように見えた。

だがそれも一瞬で、いつもの少年の顔に戻るとフィオは質問を投
げ掛けてきた。

「そういえばオレ、あんまり詳しく知らないんだけど、魔物の活動
が活発になったのって“魔族”っていう奴らのせいなんだよね？」

その変化にローエンは若干戸惑ったものの、すぐに普段通りの姿
勢を取り戻し質問に答える。

「ええ。三ヶ月前、カミューア大陸西部のカイニード王国が突然現

れた“魔族”と名乗る集団と大量の魔物に襲われ、一夜にして滅ぼされた事件から全ては始まったと言われています。各地で魔物の活動が活発になったのもその“魔族”の仕業と考えられていますね。彼らはカイニードの地を拠点に徐々にその勢力を拡大しているようです。こちらの大陸にもそれが飛び火してあちこちで影響が出ているようですが」

「今って、カミューアの方ってどうなってるの？」

ローエンは微かに渋面になった。

「噂では、西部諸国は殆ど壊滅させられたとか。カイニードの隣国ラジサード、ドーガ王国……あの強国ソフィアですら歯が立たなかったと聞き及んでいます。今はカミューア王国が中心となり敵勢力を押し留めているそうですが……」

それでもいつまで持つか、という言葉をローエンは飲み込んだ。

ローエン自身も正確な情報を知っている訳ではないが、教会に伝わってきた話では既に大陸の半分近くが“魔族”に掌握されているとのことである。

カミューア王国といえば、かの有名な“シルメリアの大英雄”や“聖女アリア”など数多くの英雄を輩出してきた大国中の大国だ。文武に秀で、大陸最強とも謳われてきた程の国であるが、しかし長らく続いた平和でかつてのような強さはすっかり鳴りを潜めてしまったらしい。

各国と協力体制を敷いているとはいえ、かなり厳しい戦況を強いられていると、ローエンは人伝に聞いていた。

だがその情報はまだ公には広まっていない。

今でこそこうして“勇者”という救世主が現れたが、それまでは“魔族”の勢力を押し留めるカミューア王国軍だけが人々の希望であつたのだ。

それが押されているなどと知れたら大混乱は必至である。秩序を維持する為にも、それだけは避けねばならなかった。

ローエンが言葉を飲み下したのは、フィオに感じた不安のせいで

もある。

もし、実はフィオが託宣の選定した“勇者”でなかったら……本当は教会側のミスで全くの別人が“勇者”なんだとしたら？

いや、そんなことはないのかもしれない。だがそうでなくとも、伏せられているこの事実を、自分は今口にするべきではない。余計な不安の種を蒔くことは無いのだ。

ローエンはそんな内心を悟られないよう、誤魔化すように無理やり笑みを作った。

「まあ、カミューアの他にもボーレント王国やソフィア王国の残存兵などが合流して戦線を維持しているそうですし、いずれライレキアからも援軍が派遣されるでしょう。今の内に、我々は“魔族”に對抗できるだけの力を集めれば十分間に合いますよ」

「うん、そうだね。……そういえば、“魔族”と“魔王”って違うの？ それとも、“魔族”の一人が“魔王”なのかな」

その疑問には、ローエンもそういえばと一瞬口を噤んだ。

「そうですね、そういえば聞くのは“魔族”の話ばかりで、“魔王”が何かしているという話は聞こえてきませんね」

“魔族”が“魔王”を擁している、という噂は聞いたことがあるが、そのものの行動自体が囁かれたことはローエンの知る限り一度も無い。

どうということなのだろうか、と考えに沈もうとしたその時、突然フィオの目つきが変わった。

馬を止まらせ、何かを探るように視線を巡らせるその表情は鋭く険しい。

倣うように馬の足を止め、まるで別人のような顔つきになったフィオにローエンが驚いていると、フィオはひらりと馬上から飛び降り手綱をローエンに突き出してきた。

「持ってて。ディン、ローエンと馬を頼む」

「おう、任せな」

見ればいつの間にかディンガードも馬から降り、槍を構えて立つ

ている。

「フィオさん、何が……」

「しばらく動かないでね。すぐ終わらせるから」

言いながらフィオはすりと鞘から剣を引き抜き、正眼に構える。本当に初めて剣を握るのかと目を疑いたくなるほどその姿は様になっっていた。

何が起きるのだろうと胸をざわつかせながらローエンがきよきよと辺りを見回すと、ふと右後方からがさがさと音を立てて何かはこちらに向かってきてるのが見えた。

茂みの影から見え隠れする、灰色の毛に覆われた頭皮とピンと立った双耳。

獣か！

ローエンがそう思った瞬間、何故かフィオは後方に向けていた体を反転させて左前方へと走り出した。

「えっ！？」

フィオが向かっているのは獣が迫る方向とまるで逆である。

何故！？ と驚き戸惑っている間にも獣はこちらとの距離をどんどん詰めてくる。

ここからでもその異形の姿が判別出来るほどに。

そう、普通の獣ではない。耳元まで避けた口からはみ出すように異常に発達した牙、うねる紫色の舌、炯炯と光る橙の双眸……。

四足の獣に似て非なるそれは、魔物と呼ぶに相応しいほどの禍々しい気配を撒き散らし一直線にローエン達を目指してきた。

「ひっ……！」

思わず上擦った声が口から漏れる。

魔物に遭遇したことはこれまでに何度かあったが、いずれの時も護衛が付いていたからまだ大丈夫だった。

しかし今は頼みの綱である“勇者”があろうことか魔物に背を向けて走ってってしまったのだ。

ローエンの恐怖が伝播したのか、馬達が落ち着きを無くして足踏

みしだす。

慌てて落ち着かせようとして手綱を引こうとすると、ディンガードが槍を持っていない方の手で馬の頭をぼんと叩きながら、まるでローエンではなく馬に言い聞かせるように言った。

「心配すんな。大丈夫だ」

「ディンガードさん、でも……っ」

ローエンが言いかけたその時、頭の後ろの方からギャンッ！という悲鳴が上がった。

「フィっ、フィオさん!？」

まさか、と思い、ローエンは愕然としてフィオの方を振り返った。そして驚愕に目を見開いた。

ローエンの視界に映ったのは、五頭もの魔物を相手に剣を振りかざすフィオの姿だった。

鉄で出来た刃をまるで重量など感じさせない様子で軽々と振り回し、一太刀で次々に魔物を地に沈めていく。

まさに鮮やかとしか言いようのない手並みで瞬く間に六頭の魔物を倒したフィオは、最後の一头を斬り伏せるとすぐに身を反転させ跳躍するようにこちらへと走り寄ってきた。

後方の魔物がローエン達に踊りかかっていたのはそれと殆ど同時である。

咆哮を上げ飛び掛ってきた魔物をディンガードが槍で弾き返す。

ひらりと着地した魔物は再びこちらに飛び掛ろうとしたが、それよりも速く走り込んできたフィオの剣が駆け抜けざまにその胴体を斬り裂いた。

断末魔を上げ、魔物がどうと崩れ落ちる。

一瞬の静寂が場に満ちた。

刀身に付いた魔物の体液を振り払って鞘に収めると、フィオは元のない笑顔でローエン達を振り返った。

「お待たせ。じゃ、行こうか」

「えっ、あの、大丈夫、ですか……」

口を突いた言葉は、しかし尻窄まりに小さくなっていく。
見ればフィオは掠り傷一つ負っていない。それどころか、息一つ
乱れた様子もない。

フィオはこのぐらい平気だよと事も無げに言つて、呆然とするロ
ーエンから手綱を受け取ると馬に跨り、再び歩き始めた。

いつの間にか馬上に戻っていたディンガードも何事も無かったか
のように平然とその後を追う。

二人の後姿を見つめながら、ローエンは未だ収まらない動悸に胸
元を掴んでいた。

（あれが、託宣の“勇者”……）

凄まじい剣の腕前を持っているとは聞いていたが、実際に目の当
たりにしてやっとそれが真実なのだとローエンは理解した。

悲鳴が上がるまで、ローエンは前方から魔物の群れが迫っていた
ことなど全く気付かなかった。

音など聞こえなかったし、注意は後方から音を立てて迫る単体の
魔物に向いていた。

恐らくそちらは囷だったのだろう。だがフィオはそれに惑わされ
ることなく正確に群れの気配を察知し、囷をひとまずディンガード
に任せて先に群れの掃討に向かったのだ。

そしてそれをいとも容易く平らげ、更には囷の魔物にも追いつき
撃退してみせた。

単に素早いというだけの話ではない。咄嗟の判断、技量、瞬発力
……そのいずれもが、恐らくあの少年はずば抜けて高いのだ。

ローエンは心の中で先程までのフィオが世界の危機を救える程の
大戦士には思えないという認識を恥じた。

確かに見た目は戦いとは無縁の、ごく普通の少年である。

だがその本質には十八歳の少年とは思えないほどの、並みの戦士
以上の才覚が備わっている。

それを少しでも疑ってしまったことに後ろめたさを感じながらも、
しかしその一方でローエンは湧き上がる希望を密かに感じていた。

（託宣は本当なんだ……フィオさんは、本物の“勇者”なんだ……！）

彼ならば必ず使命を遂げてくれるだろう。それだけの力が、彼にはある。

先程の戦闘のことなどすっかり忘れてしまったようにディングガードと笑いあうフィオの横顔に頼もしさを感じながら、ローエンは軽い足取りで彼らの後に追い続けた。

空は変わらず青く、高い。

これから先に待ち受けるだろう旅の苦難の気配など微塵も思わせない穏やかな風景に、いつの間にかローエンの心から憂いは消え去っていた――

2 - 1 : 空風の吹く町

ユーリーは思わずその愛らしい顔を不機嫌に歪めた。

先刻町の役場でも断られたばかりである。一種の集会所としての機能も担う酒場であれば望みがあるかと思いついたというのに、結局は同じ結果だった。

「まったく、誰も彼も根性無しね。魔物が怖い、だなんて」

怒りと落胆を交えながらユーリーが大きく溜め息を吐くと、心外だと言わんばかりに向かい合っていた大男が弁明してきた。

「お嬢ちゃん、仕方ねえよ。そりゃ昔でこそ遺跡に向かう冒険者は多くいたが、今はあの頃とは比べもんじゃないほど魔物の量も凶暴さもハンパねえ。何よりこんな情勢で、腕利き連中はみんな余所に担ぎ出されてるしな。町に残ってる奴らじゃとてもじゃないが荒野の魔物どもを相手になんか出来ねえよ。町を守るのだって大変なんだ」

「そこを何とかするのがセルンの町の人間なんじゃないの？ 仮にも風の遺跡の玄関口を任されているんだから」

「それも以前の話だ。そりゃ昔は魔道士連中の格好の修行場にされときはしたが、この状況下でお嬢ちゃんみたく遺跡に向かおうなんて奴の方が珍しい。あんな何も無い場所に行こうなんざ、高位の魔道士かよっぱど酔狂な奴だけだしな。ともかく、今この町で護衛を探そうとしても無駄だぜ。遺跡に行くのは諦めた方がいい」

「ご忠告ありがとう。でもそういう訳にもいかないのよ」

大男に別れを告げると、ユーリーは踵を返して酒場を出た。

砂っぽい、乾いた風が頬を撫でる。

どんよりと暗く重い曇天は、今の自分の心を映しているようだった。

「困ったわね……すっかり当てが外れちゃったわ。ここで護衛を調達できると思ってたのに」

はあ、と再び溜め息を吐き出す。

ユーリーは風精が宿ると言われる風の遺跡を訪れる為、ここセルンの町にやって来た。

セルンの町は遺跡に最も近い場所にあることから、古くから遺跡を目指す冒険者や魔道士達の拠点として機能してきた町だ。

農作物の育ちにくい痩せた土地にありながらもこうして永らえているのは、人が集まることで物資も流れてくるからである。

拠点として活用される以上はそこに様々な需要が発生する。その需要に目をつけ、商人達が供給を図るのはごく自然な流れといえよう。

しかし三ヶ月前のカイニード滅亡事件以降魔物の活動が活発になり、冒険者や修行の為に各地を巡る魔道士などの姿が見られなくなってきた。

より危険度の増した旅に出ることを避ける者もいれば、それなりに実力を持つのであれば都市や町の防衛に駆り出されている者も多い。

震源地たるカイニードから遠く、海を挟んだラトラディク大陸ではカミューア大陸ほどの脅威に晒されていないものの、緊迫した空気は既に大陸中に広がっているのだ。

そのことはユーリーも重々承知していた。

だからこそ、自分は風の遺跡を目指すのだ。

力を得る為に。

だが、まさかそれ以前の問題で足止めを食うとは思っていなかった。

「さすがに単身で荒野を渡るのは危険すぎるし、かといって今更家に戻る訳にもいかないし……うっん、どうしよう。困ったなあ」

このまま策も無くただ町に留まり続けていても時間を浪費するだけだろう。

反面実家まで戻れば護衛兵などいくらだって用意できるし、ある意味一番確実な方法と言える。

しかしその選択肢だけは絶対に選びたくないし、選べなかった。「うゝ、もー！ 何で傭兵の一人もいないのよー！？ あー、どこかに丁度遺跡に向かおうっていう強い人落ちてないかしら……」

しかしそんな人間が都合よく落ちている筈もなく、ユーリーは三度目の溜め息を吐いて肩を落とした。

そしてここで呻っていても埒が明かないと思い、ひとまず宿に戻ることにした。

厚い雲に覆われた空からは判別出来ないが、じきに日の暮れる時刻である筈だ。

旅の疲れもあるし、今夜一晩ゆっくり休んで、それからまたどうするかを考えよう……

そんな風に考えながら、沈む気持ちを引きずってとぼとぼと宿までの道のりを歩いていた時だった。

全盛期の賑わいを露とも感じさせない閑散とした町並みとは対照的な、明るい声が前方から聞こえてきた。

「やっと着いたねー。もつと近いもんだと思ってたけど、意外に遠いんだね」

「距離的には直線ですが、道に沿うとなると結構蛇行しますからね」
「お前の案内が悪いせいじゃねーの？」

「えええ！？ い、いえ、そんなことは……！」

「デイン、からかったら可哀想だよ。ローエンまた涙目になっちゃったじゃん」

「この程度でか？ 弱っ！」

「うう、す、すみません……」

何やら賑やかな集団のようである。声に釣られて顔を上げると、向かいからやってくる馬を引いた三人組が目に入った。

黒髪の少年に茶髪と金髪の青年が二人。装いからして旅人か何かだろう。

自分には関係ないとすぐに興味を失って、ユーリーは彼らから視線を逸らした。

と、

「それで、この町から風の遺跡を目指すんだっけ？」

「えっ、あ、はい、そうです。でももう日没も近いので、今日は宿で休んで出発は明日の朝にしましょう」

すれ違う瞬間に聞こえた言葉に、ユーリーは思わず目を見開いた。「風の遺跡!？」

そして殆ど反射的に声を上げて振り返っていた。

ユーリーの声に驚いて立ち止まる少年達にユーリーは構わず詰め寄った。

「貴方達、まさか風の遺跡に向かうつもり!？」

「え、まあ……」

答えたのは黒髪の少年だ。年はユーリーと同じか、少し下ぐらいだろう。純朴そうな少年だ。

少年の回答にユーリーはやったあと歓喜の声を上げた。

「良かった! 丁度風の遺跡に向かう人を探してたのよ! ねえ、良かったらわたしも同行させてもらってもいいかしら? ね?」

渡りに船とはこのことだ。なんという幸運か。

八方塞りで悩んでいた所に訪れたこの偶然にユーリーは感謝した。しかし物事とは得てして上手く運ばないものである。

少年との間に立ち塞がるように茶髪の青年がずいと割り込んできた。

「おいコラてめえ、いきなり何なんだ? お前誰だよ」

出し抜けに詰め寄ってきたユーリーを不審に思っただろう。

渋面でこちらを見下ろす青年に、ユーリーは我に返って一つ咳払いした。

眼鏡を掛けた金髪の青年はおろおろと落ち着きの無い様子で視線を彷徨わせている。……見たところ彼らの中では一番年上のようにだが。

まあいい、とユーリーは佇まいを改め、にこやかな笑顔を三人組に向けた。

「ごめんなさい。つい風の遺跡って言葉に反応しちゃって。わたしはユーリー・カイザード。魔道の修行の為に風の遺跡を目指していて、同行者を探しているところだったの。そこに折りよく貴方達が通り掛かって、思わず声を掛けたって訳」

「ほう、なるほど。そりや大変だな。まあ精々頑張ってくれ」

じゃ、と言って他の二人を連れ立って去ろうとする茶髪の青年に、ユーリーは慌てて追い縋った。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ なに、『じゃ』って！ 貴方達も風の遺跡に行くんでしょう！？ だったら一緒に行ってもいいじゃない！！」

「そうだよデイン、別に一緒に行くぐらいいいじゃんか」

背中を押されていた少年がその手をすり抜けて茶髪の青年と対峙する。

しかしデインと呼ばれた青年はしかめっ面でユーリーを一瞥すると、寝めるような口調で少年に言った。

「フィオ、こんな絶対足手まといにしかならねえぞ。ただでさえ荒野の魔物つてのは強いし数も多いんだろ？ 囲まれたらお前、捌ききれんのか？」

「む……頑張る」

「阿呆、心意気だけじゃ出来ねえこともあるだろうが。俺はお前に無茶させるなんて嫌だからな」

「ちょっと貴方！ か弱い女の子の頼みも聞けないって言うの？ 心の狭い人ね！ そっちの子がいいって言うてるんだからいいじゃない！」

拒否の姿勢を貫こうとする青年の態度に向腹が立ち、殆ど脊髄反射でユーリーは更に食って掛かった。

しかし青年も退かない。身を反転させてユーリーに向かい合うとずい顔と顔を寄せてこちらを睨み降ろしてくる。

「おー心狭くて結構！ か弱い女だろうがお偉方だろうが知ったこつちやないね。誰だろうが余計な荷物抱えさせられるなんて御免被るわ」

「誰がお荷物よ、誰が！ 自分の身ぐらい自分で守れるわ！ 馬鹿にしないでちょうだい！！」

「ほー！ じゃあ御一人様でいったらどーだ？ 自分の身ぐらい自分で守れんだろ？」

「そういう問題じゃなくて！ もうっ！ 貴方って性格悪いわね！」

「褒め言葉として受け取ってやるよ。ともかく俺はこんなよく分からん女連れて行くななんて反対だ」

きっぱりと言い切られ、ユーリーはぐうと押し黙った。

困っている女の子がいたら助けるのが普通の男性というものではないのか。

なんて“けち”な人！

ユーリーがそれ以上何も言えないのを見て勝ち誇ったような笑みを浮かべているのもまた腹立たしい。

悔しさに歯噛みして、負け惜しみに青年を見上げていると、しかし事態は思わぬ方向へ転がった。

「あの、デインガードさん……私も、この方を同行させても良いのではないかと思います」

茶髪の子の背後からひょっこりと顔を出した金髪の子が、恐る恐るといった体でそう言った。

「教会の奴、あんたは黙ってろ」

にべもなく言い返してきた青年に、修道士らしき金髪の子は怯えながらもユーリーの方を確認して言葉を続けた。

「ユーリーさん、でしたよね？ 魔道の修行をしてらっしゃるということは、魔道士の方なんですよね？」

「えっ、ええ、そうよ」

「荒野の魔物は集団で襲って来ることもあるそうですから、そういう時まとめで一掃できる魔法の使い手が一行にいるのはすごく助か

と思うんです。確かにフィオさんもお強いですが、一度に相手できる敵の数は限られますし。むしろ、こちらからお願いしてもいいくらいなのではないでしょうか？」

話す素振りからは頼りなさげな印象しか窺えないが、意外にも言っていることは筋が通っている。

少し後ろめたさを感じはしたが、しかしこの好機に乗らない手は無いと、ユーリーも修道士の意見を後押しした。

「そうそう！ この先魔道士がいるとすごくお得よ？ まあわたし達魔道士は詠唱の時間があるから接近されると弱いけど、そこさえカバーしてもらえばいい訳だし。ほら、世の中持ちつ持たれつつって言っじゃない？」

「……なんか言ってること調子よくねえか？ つかお前自分で自分の身守れるつつったよな……」

「だから、ね！ 一緒に連れてって！」

茶髪の青年を無視するように少年に懇願する。

集団の中で可決を得るなら過半数の支持を集めるのは鉄則である。金髪の青年が同意を示したとあれば、あとはこの少年の承認を得ればいい。

果たして、少年は苦笑を交えながら結論を口にした。

「デインの負けだね」

「じゃあ……！」

「うん、いいよ。一緒に行こう。よろしくね、ユーリー」

「ありがとうっ！！ 助かったわー！！」

思わず少年の首に飛びつくと、さすがに驚いたのか少年がわあと叫んであたふたした。

しかしそれには全く構わずすぐに少年から離れると、ユーリーはフツと勝ち誇った笑みを茶髪の青年に向けた。

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる青年の顔を見て、ユーリーの向腹はすっかりと落ち着いたのだった。

2 - 2 : 魔法と精霊と三つの契約

「ええっ！ フィオ、貴方、託宣の“勇者”なの！？」

予想通りのユーリーの反応に、フィオは照れ臭さと若干の居心地の悪さを感じて思わず苦笑いを浮かべながら頬を掻いた。

昨夜は簡単な自己紹介を済ませると翌日のことを考慮して早めに床に就いた為、お互いのことについてはきちんと話していなかった。なのでセルンの町から風の遺跡までの道すがらこうして改めて自己紹介をしている訳だが、正面きつて「勇者です」なんて名乗るのは意外に恥ずかしいものである。

教会のお墨付きなのだから当然もつと堂々と名乗ってもいいのだが、これまで片田舎の一村人として生きてきた身分としてはこういった肩書きというものにも馴染めないのだ。

これがもつと年若の、それこそ幼年期ぐらいであれば純粹に英雄職というものに憧れ、誇ることが出来たのだろうが、思春期真っ盛りの多感な年頃の少年にそれはなかなかもって難儀なことである。

……まあ、それでも否応なしに今から慣れていかなければならぬのもまた事実だが。

照れ隠しにぐりぐりと騎馬の鬣たてがみを弄りながらフィオは言葉を繋いだ。

「うん、まあ、そういうことで、オレ達風の遺跡を目指してるんだ」

「見つかったとは聞いていたけれど、本当にいたのね。言われてみれば確かに託宣の通り黒髪紫眼だけど……なんか全然“勇者”って感じには見えないわね」

「正直オレもそう思う」

苦笑交じりに思わず本音が口を突く。

自分がそんな大層な存在だなんて露とも思えないし、未だ信じが

たいのが本音だ。

「けど教会の人が断言してたから、多分本当にオレが“勇者”なんだろうね」

「なんだかすごく他人事みたいに言うわねえ。そんなのでいいの？」
さすがにユーリーも呆れ顔だ。

あはは、と笑い声を上げてフィオは肩を竦めて見せた。

「だって未だに実感沸かないもん。まあ、確かに体の丈夫さと剣の腕にはちよつとだけ自信あるけど……でもそれだけだし。本当にオレでいいのかなあ？」

なんて呑気なことを言ってみる。

先頭に行くローエンの顔はこちらからは窺えないが、恐らく剣呑な顔つきになっていることだろう。

期待外れもいいところである。さすがに申し訳なくなつて、フィオは心の中でそつと謝つておいた。

「そんな調子でよく託宣の“勇者”なんて大仕事受諾する気になつたわね。度胸が据わつていいるというか何というか」

「最初は断ろうと思つてたんだよ。オレ、きちんと戦闘訓練とか受けた訳じゃないし、そんな大層な身分には不釣合いだと思つたからね。でも……」

ふと、半月前のことを思い出す。

そう、フィオが町からやつて来た正教会の司祭に託宣の“勇者”であると告げられてから、まだ半月しか経っていないのだ。

初めは断ろうと思つていた。自分にはそんな大役は引き受けられない、と。

しかし、数日悩んだ末、結局フィオは託宣を受けることにした。今でも自分が世界の命運を背負えるような人間であるだなんてとてもじゃないが思えない。

けれど、それ以上に、フィオには決意に至るだけの理由があつた。「でも？」

不自然に言葉を切つたフィオを訝しく思つたのだろう。ユーリー

が先を促してくるのに、フィオは少し言葉を濁して返した。

「あー、うん。まあ、色々あってさ。それに、それなりには戦える訳だから、オレなんかでも少しはみんなの役に立てればいいなって思ってる」

「ふうん」

ユーリーが気のなさそうな顔を返す。

誤魔化したことを突っ込まれるかと冷や冷やしたが、意外にも彼女は笑顔を向けてきた。

「うん、でもそういうの解かるわ。わたしも似たような理由だし」

「ユーリーも？　そういうば魔道の修行って言ってたけど、どんなことをしに行くの？」

「簡単に言えば精霊との契約ね。通常の魔法は精霊との言葉による一時的な契約で発動出来るものだけど、それより高度な契約を結ぶことで半永久的にその精霊の力を借りることが出来るようになるの」「そうすると、何かいいことがあるの？」

フィオに魔法に関する知識は殆ど無い。

そもそも魔道士というものは都市部か大きな町にいるくらいで、田舎では殆ど見かけないものである。

というのも魔法を扱うのにはかなりの知識と修練が必要らしく、魔道士になる為には基本的に学舎などで学ばなくてはならない。そういったものがあるのは都市や町に限られるからだ。

稀に医療魔法を使える医師や魔道をかじったことのある旅人などが地方を訪れることもあるが、しかし田舎の人間が魔法の奇跡に触れることはまず無いと言っても過言ではない。

言わば、フィオにとっては魔法もまた未知の世界である。

興味津々といった体で耳を傾けるフィオの様子に、ユーリーも悪い気はしないのだろう。田舎のそういった事情も理解しているのか、彼女は得意げにその知識を披露して見せた。

「まず通常の魔法っていうのは、使いたい魔法の属性を司る精霊を呼び寄せることから始めるの。そして呼んだ精霊にどんな魔法を編

むかを言葉でもって伝えながら必要量の魔力を精霊に預けて元素を精製してもらうのね」

「元素を精製って？」

「そもそも精霊っていうのは魔力から元素……例えば火や水の元になる物質ね、それを作り出すの。普通の自然の中では精霊自身の保有する魔力からそういった元素を精製するんだけど、魔法っていうのは言ってしまうえば超自然的な力の結晶な訳。それを構成するだけの元素を生み出すには精霊の魔力じゃとてもじゃないけど追いつかないから、精製機関だけを借りる形で術者の魔力を使って必要なだけの元素を精製してもらって、そこから術者のイメージ通りに魔法を編んでいくの。これが魔法の大まかな使い方ね」

「ふんふんなるほど」

解かったのか解かっていないのかよく判らない頷きである。が、ユーリーが気に留めた様子は無い。

興味が無いのか、ディングガードなどは彼らの後方を行きつつ大欠伸などしている。

「普通ならそれで十分なんだけど、この方法だと魔法の度に精霊を掻き集めて一時契約を交わしてっていう過程が必要になるからどうしても詠唱が長くなってしまうし、何より意思の交信にも時間が掛かる。人間だって初対面の人といきなり何でも解かる仲にはなれないでしょう？　そこで特定の精霊と永続的な契約を結ぶことで、精霊を瞬時に呼ぶことが出来たり、意思の疎通を円滑にすることで魔法の構築手順を短縮したり、或いは精霊に元素精製以上の協力を求めることが出来るようになるの。それによって素早い魔法の展開やより高度で強力な魔法の構築が可能になるってわけ」

「高位の魔道士になると大概何かしらの上位精霊と契約を交わすと聞きますね。私の所属する教区の司教様も力場の精霊と契約を交わしていますし」

ローエンが僅かに振り返って話題に加わってくる。やはりこちらの話を聞いていたらしい。

ユーリーもローエンの言葉に大きく頷いた。

「『呪印の誓約』ね。あれは他の契約に比べてリスクも低いし、専門魔法の使い手なら大概が交わしているんじゃないかしら」

「ユーリーさんも呪印の誓約を？ まさか『聖魔^{せいま}の契約』じゃないですよ」

「そんな訳ないじゃない。あんな割に合わない契約、結ばうっている人の気が知れないわ」

苦笑交じりに尋ねるローエンにユーリーは呆れたように溜め息を吐いたが、フィオには彼らの会話の意味がまるで理解出来なかった。
「呪印？ せいま？ ていうか、契約ってそんなにいっぱい種類があるの？」

きつと今自分の頭の上には無数の疑問符がぶかぶかと浮いていることだろう。

或いは理解不能のあまりよっぽど怪訝そうな表情を浮かべていたか。

クス、と小さく笑ってから、ユーリーはフィオの為に解説を始めてくれた。

「精霊との契約は全部で四種類あるの。まずは一般的な魔法の過程で行われる一時契約、それから誓いを立てることで契約精霊と同属性の優先権を得られる『呪印の誓約』、血を交わすことで契約精霊と直通のラインを繋げる『血の盟約』、そして精霊と魂を融合させることで契約精霊と同等の力を得られる『魂の合約』。呪印の誓約は契約した精霊とは反対の属性の精霊と契約を交わすことが出来なくなるけれど、契約精霊の属性だけを専門に扱う魔道士にはとても重宝されている契約ね。魂の合約は別名『聖魔の契約』といって、契約精霊と同等の能力と寿命を持つ“聖魔”といういわゆる半人半精霊になる為の契約で、受けられる恩恵は莫大なものだけどそれ以上にとってもリスクの高い契約なの。だから今は殆ど行われることが無いわ」

「聖魔の契約ってそんなに難しいものなの？」

「契約に臨む者の九割以上は失敗して死ぬと言われているわね」

「成功率一割も無いんだ……」

「ええ。それに万一契約が成功しても精霊の精神干渉だとか結構色々問題が多いみたいで、割に合わないっていうのが一般的な認識よ……まあ、それでも大昔の戦争が盛んだった時代ではひと時の力を求めて契約に臨む人が後を立たなかったって話だけど」

でもそれは千年以上も昔の話よ、とユーリーは語尾に付け加えた。
「わたしが結ぼうとしているのは『血の盟約』。この契約は、血を媒介として精霊との直通ラインを繋げることで魔法構築の即時性や緻密性を飛躍的に向上させることが出来るの。勿論契約時のリスクは高いけど、その分見返りは呪印の誓約の比じゃないわ。それに……」

「……」
「それに？」

思わずフィオは聞き返していたが、何故かユーリーがその先を言うことはなかった。

一瞬慌てたように言葉を濁し、彼女は咳払いしてその場を取り繕おうとした。

「ともかく！ わたしは風精の長と盟約を交わす為に風の遺跡を目指していたって訳。今の世の中、一人でも戦力が欲しい状況でしょう？ その力を得る為に、わたしは遺跡を目指しているのよ」

濁した言葉の先を追及することも出来たが、フィオはそうしなかった。

誰にでも聞かれたくないことはあるだろうし、本人が言いたくないことを無理に聞き出すこともないだろう。何より、それだけの理由が無い。

ローエンも同じように思ったのだろう。彼も敢えて尋ねることはせず、ユーリーを立派だと評しただけだった。

デインガードはやはり興味が無いらしく、つまらなそうに周囲の景色に目を配っている。

「それにしてもお若いのに魔道士だなんてすごいですね。ユーリー

さんは魔法院か何かのご出身なんですか？」

話題を変えてきたローエンの言葉に、瞬間フィオは少し顔をしかめた。

魔法院、また聞き覚えのない単語である。そして、ユーリーはフィオと同じ年くらいに見えるのだが、その年代で魔道士というのは珍しいものなのだろうか。

果たして、その疑問にはユーリーがローエンへの返答という形できちんと答えてくれた。

「王都にはわたしぐらいの年頃の魔道士なんてゴロゴロしてるわよ。そんなに珍しいものじゃないわ。まあ、わたしみたいに院で学ばず独学で魔道を修める人間は滅多にいないけれどね」

「独学で？ それはすごいですね！」

ディンガードはもとより、フィオもすっかり置いてけぼりである。ローエンの感嘆に気を良くしたのか、ユーリーは少し自慢げに胸を反らして言った。

「わたしの父はライレキアでも有数の魔道の大家なの。カイザード家自体も昔から優秀な魔道士を多く輩出してきた名門として有名だしね。うちの研究機関は下手な魔法院よりもずっと優秀だから、そこで自力で学んだの」

「カイザード家って、あのカレリア公の？ ライレキアでも屈指の大貴族じゃないですか！」

「あら、知ってた？ そう、実はわたし、こう見えて公爵家の総領なのよ」

すごいでしょう、と言わんばかりに鼻を高くするユーリーだが、驚くのはローエンばかりでフィオとディンガードには全くそのすごさが判らなかった。

お互いに目を見合わせて、二人揃って首を傾げる。

それもその筈。フィオもディンガードも、自分達の故郷があるオリス地方の領主の名前すら知らないくらいなのだ。

そんな彼らに、二人の会話についていける訳が無かった。

「カレリア公のご令嬢とは……驚きました」

「うふふ。実はそうなの。本当はすごい人間なんだから」

「それにしても、公爵家の総領ともあろう方が、何故供の一人も連れずにこんな場所へ？ 護衛は連れてこなかったのですか？」

ローエンとしてはごく自然に出た素朴な疑問だったのだらう。

だがその鋭い指摘にユーリーの表情が氷のように固まった。

「そういえばそうだよ。大きい家の人なら、連れの人くらいたくさんいるんじゃない？」

「お貴族様の、それも“お嬢様”が単身でこんな僻地に来るなんておかしいよ。普通お付きがつくもんだろ」

フィオとディングガードもそういえばとローエンの疑問を後押しする。

今まで不思議に思わなかったが、考えてみればおかしい話だ。

それだけ大きな家の人間であれば、それも跡取り娘となれば、普通は身の安全の為に護衛として誰かしら付き従うものだらう。そのくらいは田舎育ちのフィオ達にも分かる。

だがフィオ達が会った時ユーリーは一人だった。連れがいたようにも見えない。

なんで？ と尋ねようとした所で、ユーリーが非常に気まずそうに視線を逸らしているのが分かった。

「ユーリー？」

「あの、えっと、それは……」

今までの快活さはどこへやら、ユーリーは非常に言い辛そうに手綱を握る手を揉んでいる。

今度はさすがに聞き逃す訳にはいかないだろう。

フィオはユーリーにどうということかと更に問い掛けようとした。その時である。

2 - 3 : 想定とは得てして外れるものである

荒野というからには、視界いっぱい広がる大地において当然遮蔽物となる草木が生い茂っていることはない。

あるのは剥き出しになった赤茶けた乾土と石塊が散乱するばかりの荒涼とした風景のみである。

逆を言えば非常に見通しが良く、近づくものがあればすぐにでも見つけられる場所とも言える。

周囲には自分達以外の生き物の気配は窺えない。ただ空風が吹くばかりの世界。

馬を駆る道中、ずっとそんな景色ばかりが続いていた訳だが、しかしながら同じ状態の連続というものはその中に身を置く者に倦怠と油断を齎すのが常である。

その危機感を抱き続けることが重大な事態を回避する最良の手であるのに彼らが迂闊にも渦中に飛び込む格好となったのは、その認識が欠けていた証拠と言えるだろう。

「！！」

最初に異変に気付いたのはやはりフィオだった。

咄嗟に声を掛け、全員の馬の脚を止めさせる。

それから殆ど間髪を入れず、彼らの進行方向の地面がボコボコと不自然に盛り上がりだした。

否、前方だけではない。

右、左、後方、斜め……四方八方の大地が一斉に唸りを上げ、乾土を押し上げていく。

「なんだ！？」

ディンガードの声に呼応するかのようにバラバラと乾土を振り落として現れたのは甲虫のような外骨格に覆われた頭部を持つ巨大なみなず蚯蚓の化け物だった。

本来の蚯蚓にはある筈の無い黄ばんだ歯が口の端から覗き、ガチガチと音を立てている。

硝子を擦り合わせたような甲高い鳴き声がその間から漏れ聞こえた。

「魔物！」

「囲まれたか……！」

ぐるりとこちらを取り囲む魔物の群れを牽制するように睨めつけながらフィオは腰の剣を引き抜いた。

ディンガードも槍を構えて警戒する。ローエンとユーリーは敵影の多さにやや尻込みしているようだ。

地を這いながら躍り寄って来る魔物の群れに、フィオ達はじりじりと追い詰められていく。

「フィオ、どうする？ さすがにこの数はやべえぞ」

「うん……」

ディンガードの焦りはもつともだ。

ローエンが戦えるというならまだしも、セルンまでの道中で戦闘においてローエンが役に立ったことは一度も無い。またディンガードもフィオ同様魔物との戦いに慣れているとはいえ、大概はフィオの支援に徹することばかりで腕自体はそれ程高くなく、殆どフィオ一人が敵を撃破してきたようなものである。

しかし四方を囲まれているこの状況では、いくら個々が雑魚であろうと一斉に襲い掛かってこられればさすがのフィオでも対処しきれない。

フィオとディンガードの二人きりならまだしも、ローエン達まで守りながら敵をやり過ごすのは至難の業だ。

策を考えあぐねている間にも敵はどんどん距離を詰めてくる。

焦燥感に心が急き立てられたした頃、はっとしたようなローエンの声がフィオの耳に届いた。

「フィオさん！ ユーリーさんの魔法なら一気に敵を薙ぎ払えるのでは！？」

「！ そつか！」

そのことをすっかり失念していた。彼女は魔道士なのだ。魔法ならば敵をまとめて始末することも出来る。

これぞ天啓、と言わんばかりに期待を込めてフィオはユーリーを振り返った。

「ユーリー！」

……が。

「えっ……あ……」

「……ユーリー？」

振り返って見たユーリーの顔は驚くほど青ざめていて、その細い両肩は小刻みに震えている。

まさか魔物に怯えているのだろうか？ しかし今はそんなことを

言っている場合ではない。

「ユーリー、頼む。魔法で正面の敵を倒してくれないか」

「あの……ええと、その……」

徐々に俯いていくユーリーを奮起させようと、フィオは力強く彼女を鼓舞した。

「怖いのは解かるんだ。でも、ユーリーの協力がなきゃオレ達みんなやられちゃう。お願いだ」

「う……わ、解かったわ。やってみる……」

これまでの自信たっぷりだった態度はどこへやらといった風情だが、気にしても仕方が無いだろう。

フィオは前へと向き直ると皆に作戦を伝えた。

「ユーリーの魔法で血路を開く。道が出来たら一気に駆け抜けて。殿はオレが引き受ける。デイン、先導任せた」

「おう」

「よし！　じゃあユーリー、頼むね」

こくりと頷き、敵の動きを警戒しながらユーリーが前へ進み出る。彼女が魔法を打ったら一気に駆け抜ける——その時を、三人は固唾を吞んで待ち構えた。

「……………」

ユーリーは集中するように瞼を落とし、両手を前へ突き出す。
一度深く深呼吸し、唇を震わせながら小さく口を開く。
そして、僅かな間の後、大音量が荒野に響き渡った。

「……………っ！！ やっぱ無理iiiiiiiiiiii！！！！！！
！ 怖iiiiiiiiiiii！！！！！！！！」

わあわあど喚き散らしながらユーリーが耳を塞ぐように頭を抱え
馬上で蹲る。

一瞬何が起きたのか解からなかったフィオ達はぽかんと立ち尽く
していたが、その隙を見逃してくれるほど敵は甘くなかった。
それを皮切りにするように、魔物の群れが奇声を上げ一斉にフィ
オ達に襲い掛かる。

慌てて意識を引き戻し、フィオは咄嗟に剣を横薙いで飛び掛って
きた蚯蚓達の胴体を斬り払った。

「ちよっ！ え！？ どういうこと！？」

「てめ！ このクソ女！ 土壇場で怖気づくとかふざけんな！！」

「うつつ、だって怖いものは怖いんだもの！ 無理なものは無理な
のー！」

「んだとコラあー！！！」

「デインガードさん！ 今ユーリーさんを責めても仕方ないでしょ
う！ それよりこの状況を何とかすることの方が……うわあっ！」

拮抗が崩れた今、悠長なことは言ってられない。

ローエンに取り付こうとした魔物を突きで引き剥がすと、フィオは全員に聞こえるよう声を張り上げた。

「作戦変更！ オレが正面突破するからみんなは死に物狂いでついて来て！」

了解を取るより早くフィオは馬の腹を蹴り、正面の魔物の群れへ突っ込む。

足元に取り縋ろうとしてくる蚯蚓達を蹴散らしながら、或いは飛び掛ってくるものを剣で薙ぎ払いながらフィオは全速力で群れの中を駆け抜けた。

2 - 4 : 少女の嘘と真実

魔物の群れを突破した後も警戒の為そのまま馬を走らせ、漸く一息つけそうな岩場を見つけた頃には既に太陽が南中を過ぎていた。馬の汗を拭いて休ませた後、フィオ達もへたり込むように岩場に腰を下ろした。

心地よく吹き抜ける涼風が疲労感を洗い流していくようだ。

「焦ったあ……いやあ、ほんと危なかったねー」

「本当に、助かって良かったですね。もう駄目かと思いましたよ」

口ぶりこそ軽いが、危機一髪だったのは本当である。あの場を切り抜けられたのも運が良かったからだ。

苦笑いを浮かべながらも無事を喜ぶフィオとローエンだったが、そんな二人を余所にディンガードは射殺すくらいの勢いでユーリーを睨みつけていた。

理由は勿論、一つしかない。

「おい、てめえ。ありやどついうことだ？ 任せろつつったのはどこのどいつだ、あ？」

ディンガードの非難にユーリーはすっかり縮こまっている。

肩を落として俯くその姿は、自信に満ちたいつもの彼女からはおよそかけ離れたものだ。

ディンガードの怒りも解るが、これでは彼がユーリーをいじめているようにしか見えない。

「デイン、そんなに責めるなよ」

さすがに可哀想に思ったフィオはデインガードを窘めたが、しかしデインガードもこの時ばかりは引き下がらなかった。

「責めるなだと？ フィオ、俺達はいいつのせいでヤバイ目に遭ったんだぞ。文句の一つや二つ、言って当然だろ？」

「でもさ、何とかなったんだし、もういいじゃないか」

「良くねえ。全っ然良くねえ。こいつ俺達を騙しやがったんだぞ？魔法が使えるから連れてきたつてのに、肝心な時に使えなかったじゃねえか」

「それは……」

その点に関してはフィオもそれ以上ユーリーを庇うことが出来ない。

確かにフィオ達がユーリーの同行を認めたのは、彼女が魔道士だからという理由からだ。

なのに魔法が必要となった場面で何も出来なかったというのでは話が違う、というデインガードの主張は至極全うなものである。

どうしたものかと言葉に迷ってユーリーを見ると、彼女はしょぼんとした様子で視線を落としていた。

「ねえユーリー、どういふことなんだろう？」

「……………」

フィオが声を掛けるも、彼女は俯いたまま何も応えない。

あっさり痺れを切らして噛み付こうとするディンガードを慌てて制止していると、ユーリーは言いあぐねるようにもごもごしながらその重い口を開いた。

「その……ごめんなさい。わたし……」

「謝るってことは全部嘘か？」

「違う！ いや、あの、そうじゃなくて……その」

「うだうだ言ってねえではつきりしろ！ どうなんだ！」

「だからあつ！ 魔法は使えるけど怖くて使えないの——！！！」

……。

ユーリーの絶叫に、またしてもぼかんと立ち尽くす三人。

「……なん、なんだって……？」

「だから、魔法は使えるの。理論上は。でも怖くて使えないの。OK？」

「OK？ じゃ、ねーよ！ 何だその『理論上は』って！ 意味わかんねえし——！」

「え？ 理解できないの？ 貴方ひよつとしなくても頭悪い？」

「よしきたお前マジぶつとばすわ」

「ちょ！　ちよつとディンガードさん！　相手女性の方ですから！」

「知るか！　こいつが駄目ならてめえを殴る！」

「えええー！ー！！？」

反射的に脱兎の如く全力で駆け出したローエンに、オラ待ちやがれー！　と叫びながら彼を追いかけたディンガード。

突如追いかけて始めてしまった二人のことはこの際放っておくとして、フィオはユーリーに向き直ると彼女の話詳しく聞くことにした。

「怖いって、何が怖いのか？　まさか魔物のこと？」

「ううん、そうじゃなくて……わたし、魔法を使うのが怖いのか」

「魔法を使うのが怖い？」

そう、とユーリーは頷いた。

「正確に言えば、魔法を構築するのが怖い。構築の過程でうまく魔力を制御出来るかどうか不安で……だから、実は今まで一度も魔法を使ったことが無いのよ」

ぎゃあああ、とすぐ近くから悲鳴が上がる。ローエンがディンガードに捕まったのだらう。

二人の茶番はひとまず気にせず、フィオはそのままユーリーの話に耳を傾けた。

「理論的には全部理解してるの！　どうすれば魔法を構築できるのか」

か、魔力をどう操ればいいのか、精霊との交渉も全部解かつてる。ただ、自分の魔力を制御しきれるかどうかが、その部分だけどうしても自信が持てなくて……これまで努力して何度も試みてきたんだけど、いつも精霊を呼び寄せる段階で二の足を踏んでしまうの」

「魔力の制御、ってそんなに難しいものなの？」

「ううん、きちんと訓練を積んだ魔道士なら、剣士が剣を振るうように自由に操れるものよ。ただ、その制御を誤ると魔力が暴走を起こして大変なことになるの。最悪、魔力が暴発して周辺一帯を吹き飛ばす事態にもなりかねない」

ユーリーの言葉にフィオはぎょっとした。

魔法とはそんなに危険なものなのか。

そんなフィオの心情を察したか、ユーリーが笑ってそれを否定する。

「でもそんなことはまず怒らないわ。普通はね。……それは解かっているんだけど、大丈夫って思うからわたしだって魔法の修行を積んできた訳だけど……でも、どうしてもその恐怖心が拭いきれないの」

本来起こる筈の無いことならば、何故それ程に彼女は怖れるのだろうか。

不思議に思うフィオだったが、しかし、その一方で納得もしていた。

自分の内にある力を持て余し、或いは怖れる気持ち……それは、フィオもよく知るものだ。

「わたしが精霊と契約する理由は、精霊に魔力の制御を手伝っても

らう為なの。血の盟約によって精霊とラインが繋がっていれば、精霊に制御しきれずに溢れた魔力の受け皿になってもらえる。そうすれば、わたしは何の心配も無く魔法が使えるようになると思って。……本当は、周囲には止められているのよ。だから王立の魔法院にも通わせてもらえなくて、仕方なくこっそり独学で学ぶしかかったの。……ばれてよく叱られたけど。そんなだから、今回契約の旅に出ることになっても家の者に言う訳にいかなくて、黙って一人で出てきたの」

そこで漸くフィオは得心がいった。

大貴族の娘ならば供の一人も連れていておかしくない筈なのに彼女が単身で同行者を探していたのはそういうことだったのか。しかし、そこでまた疑問が浮かんできた。

「そこまでしてどうしてユーリーは魔法を使おうとするの？ 貴族の生まれなら自力で身を守る必要だって無いだろうし、女の子なんだから徴兵の義務とかもないでしょ？ なのに何故、周りの反対を押し切ってまで魔法を習得しようと思うの？」

「だって、自分に力があるのにそれを使わないのは勿体無いじゃない。わたしには魔法を編むだけの魔力がある。それを使わないのは宝の持ち腐れだし、何より、持って生まれた意味が無いもの。わたしはわたしが持つこの力に意味を与えたい。無駄なんかじゃないって、証明したいの」

ユーリーは力強い眼差しで真っ直ぐ前を見据えて言った。

その言葉には一片の迷いも、また誇張する響きも感じられない。それは真摯な決意だった。

ユーリーはフィオに視線を移すと懇願するようにフィオの手を取った。

「フィオ、お願い。このまま一緒に連れて行つて。確かにわたしは役立たずだし足手纏いかもしれない。それでも、どうしてもわたしは風精の長に会わなきゃいけないの！ 今更家には戻れないし……お願いよ、どうか……！」

「ユーリー……」

フィオは押し黙って彼女を見つめていた。

それが果たして家出同然で飛び出し、危険に身を晒すだけの理由になるのかはフィオには判らない。ひよつとしたら、もっと深い事情があるのかもしれない。

ただ、ユーリーの切実な思いだけは、充分に理解できた。

「……まあ、ここから一人で町に戻れとも言えないしね」

「！ じゃあ……！」

「うん、いいよ。一緒に行こう」

「ありがとうっ！ フィオ、ありがとう……！」

喜びを満面に浮かべて抱きついてきたユーリーに、フィオは驚きのあまり思わずわあと声を上げてしまった。

それに気付いたのか、漸くデインガードと半泣きのローエンが二人の傍に戻ってくる。

「ちよっ、ユーリー！」

慌てて引き剥がそうとするも、ユーリーはなかなか離れてくれな

い。

羞恥というより、丁度首を絞める格好になっていてだんだん息が苦しくなってきたのだ。

フィオの意識が酸欠で遠のきかけるのと状況を把握したディングがードがユーリーを引っぱがしてくれたのは殆ど同時のことだった。

2・5：古より遺されし場所

陽はゆっくりと西の方角に傾き、空が次第に赤みを増していく。

突き刺さるような金色の光が降り注ぐそこに、その遺跡はあった。周囲を石造りの外壁がぐるりと取り囲み、正面の大門から列柱の立ち並ぶ参道が真っ直ぐに延びている。

中央に坐す建造物は二階建てのようで、一階部分は上階を支えるように列柱廊が廻らされているだけで入り口らしきものは見当たらない。

参道の先には大階段が設えられており、中央の建物の丁度二階部分に当たるテラスに繋がっている。正面玄関はそちらに設けられているようだ。

かつては神殿として使われていたその遺跡は、しかし経年の劣化により門蓋は途中から崩れ落ち、列柱の路も殆どの柱が折れて形を失っていた。外壁も元の高さを保っている場所など皆無に等しく、小さな子供ですら容易に越えられそうな場所もある。

風が絶え間なく吹きすさび、砂利が砂塵に混じって石垣に打ちつけられながら、バラバラと音を立て転がっていった。

この建造物が遠い過去に打ち捨てられた理由が何であるかは、今の彼らに推して知るべくも無い。

しかしながら、至る所が長年風雨に晒されてきたことで激しく朽ちているものの、西日に照らし出されたその姿は根底に持つ荘厳さを微塵も失っていないように窺えた。

「ここが、風の遺跡？」

手で底^{ひたし}を作り建物を見上げながらフィオが呟く。

ローエンはずれた眼鏡を直しながらそれに頷いた。

「ええ。ここに風精の長がいらっしゃる筈です」

びゅうと吹き込んだ一陣の風が一行の間をすり抜ける。

確かに、これだけ風の強い場所なら風精が棲んでいるというのも納得できる。

「あれから割とすんなり来れて良かったね」

「えっ？　そ、そうですね……」

フィオの呑気な言葉にローエンは引きつった笑いを浮かべた。

そんな訳は無かった。

ここに来るまで何度も魔物の襲撃を受けたし、その度にローエンは肝を冷やしたのだ。

だが最初の出来事があってからというものの、フィオも学習したらしく、警戒を怠ることなく常に周囲へ気を配り、敵の接近を瞬時に察知出来るようにしていたお陰で敵に囲まれるよりも早く対処出来るようになっていた。

すんなり、というのは、フィオに言わせれば苦戦せずに、という意味である。

だがローエンにしてみればあれだけ何度も襲われていながら『すんなり来れた』とはとてもじゃないが言えない。

フィオの潜在能力の果てしなさを思いながら、ローエンは気持ちを切り替えてユーリーを振り返った。

「ユーリーさん、大丈夫でしたか？」

ローエンですら疲労感満載なのだ。女性のユーリーが疲れていな

い筈はないだろう。

そう思っただけで、彼女は平気よ、と笑顔を返してきた。それよりも、興奮の方が強いのだろう。

風の遺跡は、魔道士にとって聖域のようなものだ。

その場所に辿り着けた感慨でいっぱいという風に、ユーリーは目を輝かせて遺跡を見つめていた。

「よし、それじゃあ行こうか。あ、馬はどうしよう？ さすがには連れてけないよね」

「どこかに繋いでおきましょう。この辺りは精霊の長の領域ですから、魔物も怖れて近づいてこない筈です」

手綱を繋げそうな場所はないか、と視線を巡らせていると、ローエンはデインガードの様子がおかしいことに気付いた。

固く手綱を掴んだまま直立して動かず、表情を強張らせて遺跡の方を凝視している。

若干青ざめているように見えるのは気のせいだろうか？

「デインガードさん？ どうか……」

されたんですか、と紡ぎかけた言葉は、ぎゃあ！ というデインガードの悲鳴に敢え無く掻き消された。

「ディ、デインガードさん!？」

びつくりして目を瞬かせていると、デインガードが恐ろしい形相でこちらを振り返ってきたので更に驚く。というより、ビビる。

思わずこっちがぎゃっ！ と悲鳴を上げそうになるのをぐっと堪え、吐き出しかけた息を無理やり飲み下す。

するとすぐにディンガードの表情が軟化し、ほっとしたものに変わった。

全く何が起きたのか解からずローエンが目を白黒させていると、何事かと思ったのだろう、口々にどうしたんだと言いながらフィオとユーリーが傍に寄って来た。

「いや、あの、ディンガードさんが……」

「ディンが？ ディン、どうかしたの？」

「……別に、何でもねーよ」

ぶっきらぼうに言い放つディンガードだが、その顔はやはりどこか青ざめたように見える。

怪訝に思っていたローエンだが、ユーリーの言葉がその疑問に答えを齎してくれた。

「なあに、怖いものでも見たような顔しちゃって。お化けでも見た？」

「見えてねえよ！！ 見えねえよ！！ 見たくねえし！！！！」

ただの冗談だったというのに、過剰な程の反応を示すディンガード。

…… もしや？

ローエンは頭に浮かんだ疑念を思わず口に出していた。

「ディンガードさん…… ひょっとして、お化けが怖いんですか？」

「はー！？ 怖くねえし！ 馬鹿にすんじゃねえ！！ つーかお化け

なんていねえし！！ いねえよな！！？」

最後は何故か疑問形である。

強がってはいるが、デインガードがお化けに怯えているのは明らかだ。

はあ、とあからさまに溜め息を吐いて首を横に振りながらユーリィが呟く。

「怖いよねえ」

「怖くねえつつってんだろ？がぶっ飛ばすぞてめえ！！！」

顔を真っ赤にして怒鳴るデインガードとは対照的に、ユーリィは涼しい顔で……というか、すごく面白いおもちゃでも見つけたような、非常に楽しそうな笑顔でデインガードを見ていた。

「そう？ 怖くないなら早く遺跡の中に入りましょ？ こういう古い遺跡とかの類ってお化けとか幽霊とかがいっぱい棲んでるって聞くけど、デインガードは全然平気なのよね？ 頼もしいわあ」

「うわあああやっぱいんのかよここおおお！！！！！！！」

ユーリィの嫌味など全く聞こえていないようで、デインガードは涙声で喚き散らしながら両耳を塞いでその場に蹲ってしまう。

あまりの態度の変わり様に、ローエンは呆然と目を瞬かせるばかりだった。

フィオといえば、腕を組みしみじみとした様子で頷くだけである。

「デインは昔から幽霊の類、苦手だもんねえ」

「うつせえ！ 嫌いなもんは嫌いなんだよ！！」

「そうなの？ 意外ね。そういうの信じなさそうに見えるけど」

「うん、何かそういうのが見えるんだって。オレには見えないけど」

「出来ることなら見たくねえっつもの！！ つか何でお前らには見えねえんだよ不公平じゃねえか！！！」

「え、じゃああれもディングガードには見えるの？」

「指さすな指いい！！！！！」

「誰もいないわよ」

「えー？ 何だよ！ ビビらせんなよったく！」

「あ、いたかも」

「やっぱいんじゃねえかクソがああああ！！！！！！！！！」

再び喚き声を上げて縮こまるディングガードの様子があまりに面白く、フィオとユーリーは目を見合わせてげらげらと笑い声を上げた。

「笑うなてめえら！！！！！」

「あ、なんかいた」

「ぎゃああああ指さすな馬鹿あああああ！！！！！！！！！」

……傍から見れば、実にほのぼのとした光景である。

（ああ……神聖な場所なのに……）

つくづく真面目な雰囲気になりきれない人々である。緊迫感、仕事してください。

などと内心思いながらも口に出せないローエンは根っからの引込み思案である。

仕方なくフィオとユーリーの戯れがひとしきり落ち着くまでローエンは遠巻きにその様子を眺めているしかなかった。

*

閑話休題。

比較的背の高い列柱の一つを選んで馬の手綱を結わえ付けると、フィオ達は慎重に中央階段を昇り遺跡内部へと足を踏み入れた。損傷や劣化は激しいものの基礎自体はしっかりしているようで、幸い建物が崩れ落ちるような気配は無い。

玄関口から内部へ一歩踏み出すと、空気ががらりと変わる。

微かに湿気を帯びるひやりとした空気が肌を撫でる。涼しいというよりいつそ寒いくらいだ。

玄関口を抜けた先には正面に大扉と、左右に回廊が延びている。

大扉は瓦礫が邪魔をして通れそうに無いので一行は回廊を右に進むことにした。

中央の部屋の外側を囲むようにして廻らされている回廊には採光用の小さな窓がいくつもあったが、日の傾きかけた今時分には光量

が十分に稼げない。

松明を灯したのはその為だが、ローエンがそれを持ち先頭に行くのはいざという時にフィオが自由に立ち回れるようにと配慮されたからである。

……が。

「……デインガードさん、その、大変申し訳ないのですが、いくらフィオさんにしがみつけないからって私の服を引っ張るのはやめて頂けませんか……」

非常に心苦しくはあったが、ローエンは意を決して背後で震えるデインガードにそう言った。

遺跡内部へ入った辺りからずっと掴まれている法衣の裾はすっかり皺くちやになっている。ひよっとしたら伸びているかもしれない。しかしデインガードが裾を握る手を離す筈も無く、逆に睨まれるだけであった。

若干涙目になっているのがまた怖い。

「お前、俺を見捨てる気か」

「いえ、あの、見捨てるつもりはありませんけれども……！ 何とか、すぐ動きづらいと申しますか……」

「嫌だ。断る」

「デイン、ローエンが困ってるよ。離してあげたら？」

「無理だ。離したら俺が死ぬ」

「死なないよ……大げさな」

さすがのフィオも呆れ顔だ。

ユーリーも情けないと言いたげな表情でディンガードを見ている。

「何がそんなに怖いものよ。ここは精霊の加護に守られた聖域なのよ？　これだけ神聖な空気に満ちた場所にお化けなんて出る訳ないでしょう」

ユーリーの言い分はもつともだ。

この遺跡は精霊の長の、いわば縄張りである。その内側に害悪となる存在が棲める筈もないだろう。

しかしディンガードは納得しないようで、表情を強張らせたまま落ち着きなく周囲に視線を彷徨わせている。

「お前らには判んねえからそんな呑気なことが言えんだよ……さっきからすつげえ声が聞こえっし、色んなもんがこつちの様子窺ってる。遺跡の外よりも気配だつてずっと強くなってるし……絶対ここやべえのいんど……」

「気のせいじゃないの？」

「ンな訳あつか！　見てみるこの鳥肌を！　ここ入ってからずっと粟立ちっぱなしなんだぞ！」

一体何自慢だろう、と最早手を離してもらうことを諦めたローエンは乾いた笑いを浮かべた。

が、ディンガードの言葉を反芻してみると、ふとある疑問がローエンの中に浮かび上がる。

（……ん？　あれ？　それってもしかして……）

幽霊の存在を怖がる様子ばかりに目がいつてしまったが、ひよつとするとこれは……。

「デインガードさん、ひよつとしてそれは……」

抱いた疑問を口にしようとしてローエンが振り返りかけた時、フィオが前方を指差して声を上げたので反射的に言葉を止め、そちらに視線を戻す。

どうやら回廊の終わりのようだ。前方に繋がる通路の他に、玄関前で見たものと同じ造りの大扉と、右手に更に奥へ続く渡り廊下を見つけた。

こちらの大扉は生きているようで、開放された跡も窺える。しかし今はこの部屋に用はなく、向かうべきは渡り廊下の先である。

採光窓の無い分厚い壁に覆われた渡り廊下を抜けると、広く開けた場所に出た。

装飾彫りの施された列柱が左右に幾つも並び立つ。四方の壁にも画が彫刻され、中央奥側には石壇のようなものが見える。

「かつては祭祀の間として使われていた祭殿ね。千年以上も昔からあると言われているのに殆ど形状が損なわれていないのがすごいわ」

室内を見渡しながらユーリーが恍惚とした表情で溜め息を漏らす。確かに、外壁の風化具合に比べて遺跡内部の損傷は驚くほど少ない。外壁などは触っただけでも崩れそうだったのに、ここの壁はちよつとやさつとの衝撃などではびくともしなさそうである。

フィオも興味津々といった体で柱の装飾を眺めている。

松明で壁画を照らしながらローエンもまたその彫刻の素晴らしさに目を奪われていたが、服を強く引かれる感触に意識を引き戻され、のんびりしている場合ではないことを思い出した。

「皆さん、見学は後にして、今は風精の長の元へ向かいましょう。奥の扉の向こうが祭壇の間の筈です」

「あ、そうだね」

本来の目的を忘れていたんじゃないかと思うくらい、すっかり觀光気分で眺めていたフィオが照れ笑いを浮かべながら小走りでローエン達のもとへ戻ってくる。

ユーリーも名残惜しそうにしていたが、見たいのならば精霊との謁見を済ませてからでも遅くはあるまい。

通路を照らそうとローエンは松明を前に差し出した。

その時だ。

ぐいと法衣の裾が強く引かれ、思わず後ろに転げそうになる。

「ちよつ、デインガードさん？ 危ないじゃないですか」

さすがに抗議しようと背後を振り返ると、デインガードは真っ青になりながら、ローエンには目もくれず真っ直ぐ前方を凝視していた。

「え？」

見れば、ついさっきまで楽しげだった筈のフィオの表情もいつの間にか緊張で強張っている。戸惑っているのはローエンとユーリーだけだ。

何だ、と訝しく思っ二人の視線の先を辿ると、薄闇を抜けた先、丁度奥の扉の前にある石壇の辺りが光源も無いのにぼつと淡い光を放っていた。

光は集束することに急速に強さを増していく。

そしてそれは遂には音も無く爆発し、部屋全体を光で満たした。

「っ!!」

突き刺さるような光の奔流が薄暗さに慣れた目を容赦なく苛む。

痛みすら感じる強烈な光の刺激が次第に収まってきた頃、ローエンは漸く、恐る恐るだが瞼を開けた。

視界がチカチカと明滅する。

目眩がしてよろけそうになったが、裾を引かれる感覚に意識を取り戻し、何とか踏み留まる。

「い、今のは……、……!？」

ふらつく頭を押さえながらも一度光源のあった石壇の方を見たローエンは、驚愕に言葉を失った。

一体どこから現れたというのだろうか。いつの間にか一匹の獣が不躑に石壇の天板を踏みつけていた。

獅子を思わせる四足のその獣は翡翠色の鬣たてがみを靡かせながら金色の双眸でこちらを睨んでいる。

「ま、魔物!？」

「でつ、でもここは聖域の筈よ!？ 魔物が中に入れる訳が……!」

そう、この遺跡は風精の長の領域。その力を怖れて魔物はこの場所には近づけない筈なのである。

しかし現実として目の前には魔物がいた。……本来獣が持たざる魔力をその身に宿した、不浄の存在が。

素早くフィオが皆の前に躍り出て剣を構える。

するとその瞬間、窓の無い屋内であるというのに突風が室内を駆

け抜けた。

「うわっ！」

身構える暇もなく手にしていた松明が吹き飛ばされる。

風圧で火の消えた松明は、石壇から放たれる光の届かない部屋の端まで転がっていき、やがて闇の中に溶けていった。

暴れ狂うように吹きすさぶ風は、どうやら魔物から発せられているものらしい。

こちらを睨めつける魔物の金眼がぎらりと不気味な光を放った。

2 - 6 : 風精の試練

風が奔る。

巨大な質量の物体に押し潰されるような圧力がフィオ達を襲った。

「くっ……！」

フィオは体勢を低くしてそれに堪えたが、ユーリーとローエンは容易に吹き飛ばされ、後ろに転げてしまう。

僅かに体勢を崩したものの何とか踏み止まったディンガードが素早く二人の元に駆け寄る。フィオに余計な負担をかけない為の配慮だ。

ユーリー達のことはひとまずディンガードに任せ、フィオは改めて獅子の姿をした魔物と対峙した。

爛々と輝く金の双眸がフィオの紫眼と搗ち合う。

射竦められるような感覚に背中を冷たいものが走った。

柄を握る手袋の内側がじわりと汗ばむ。

奥底から湧き上がる感情を、果たして何と呼ぶべきなのだろうか。フィオが答えを出す前に、低く唸るような“声”が頭の中に響いて思考を掻き乱した。

《……応えよ。汝は誰ぞ》

鼓膜を介さず脳に直接届く声は慣れないせいか、酷く不快感を催させる。

突如として聴こえてきた声を訝しく思ったが、その正体は一つしか思い当たらない。

獅子の金眼が、まるで答えを促すように鋭く光った。

「オレはフィオ・ノークス！ ノアの託宣に予言された“勇者”として風精の長にお会いしに来た！」

大声を張り上げて答える。そうでもしなければ、暴風吹き荒れるこの祭殿内ではとても声が届くとは思えなかった。

しかし獅子の声はそれをものともしないくらい鮮明にフィオに届いた。

《“勇者”……なれば、我が試練、受けてみよ。その資質を我に示せ》

「!？」

咆哮が耳を劈く。

一層強く風が駆け抜けた後、獅子はひらりと石壇を飛び降り、ゆつくりとフィオに近づきだした。

「試練！？ それって……」

一体何のことなのだ？ あまりに突然のことでフィオにはまるで状況が掴めない。慌てて構えた剣先がぶれる。

ただ一つ理解出来たのは、獅子のような風貌をしたこの魔物が今まさにじわじわとフィオとの距離を詰めてきていることだけだ。

取るべき行動の選択を迫られたフィオは大きく吸い込んだ息を一瞬止め、意を決して獅子へと一直線に駆け出した。

デインガードに助け起こされ、漸く立ち上がったローエンは驚きに目を見張った。

フィオが正面から獅子に向かっていったことにはではない。その速さにだ。

フィオは強烈な向かい風をもともしない驚異的な速さで間合いを一気に詰め、振りかざした刃を思い切り打ち下ろした。

一刀のもとに全てを両断してしまいそうな剣筋だ。その威力は戦闘に関して素人なローエンですら見ただけで推して測れる。

だが予想に反し、フィオの剣が獅子を両断することはなかった。

「!？」

ガキンッ！ という金属同士がぶつかり合うような鋭い音が祭殿内に反響する。

フィオの剣は獅子の肩口に狙いを済ませていた。しかし刃が獅子の肉を裂くことは無く、皮膚の皮一枚削げずにただその毛並みを撫でただけだった。

思いもよらぬ感触に一瞬の硬直を見せたフィオの隙を狙ったかのように獅子が咆哮を上げ、鋭い爪を持つ前足を振り上げた。

「フィオさん!!」

思わずローエンは悲鳴を上げた。

フィオは咄嗟に転げるように真横へ飛び、寸でのところで爪の一撃を回避する。

転がる勢いを利用してそのまま立ち上がり、すぐさま剣を構えながらフィオは驚きと焦燥の混じった顔で獅子を凝視した。

「硬い……！ 岩でも斬りつけたみたいだ」

びりびりと鈍い痺れを発する両手にフィオは眉を顰めた。

まるで鋼のような体だ。全身がこうだとするなら、刃を立てるのはまず無理だろう。斬りが主体のこの剣で倒すのは非常に困難だ。下手に斬りつければ刀身が持っていられるだけである。

外身に斬撃が効かないとなればあとは内部に衝撃を加えて倒すしかない。殴打系の武器でもあればいいのだが、しかしこの場にあるのはフィオの剣とディンガードの槍が精々である。ローエンとユーリーの持つ護身用の小刀では焼け石に水のようなものだ。

「困ったな、どうしよう」

言葉は軽快だが、内心では焦燥に駆られるようにあらゆる考えが駆け巡っている。

厄介なのは頑丈な皮膚だけではない。この風もだ。あの獅子を中心に吹き荒れる風は斬りかかる者に常に向かい風となる。走る勢いが殺がれ、体勢を崩しやすくなる為、攻撃の威力が込め難くなるのだ。

そうこうしているうちにも獅子は猛烈に吹きすさぶ風を纏ってこちらへと飛び掛ってくる。

覆いかぶさるように振り上げてきた前足を避ける暇は無く、素早く掲げた刀身でそれを受け止める。

「くっ！」

肩の骨が、腕の筋肉が悲鳴を上げる。体積も重量もフィオの四倍はありそうな相手だ。この負荷を受け止め続けるのはさすがにきつい。

「離れやがれこの野郎ッ!!」

駆けつけたディンガードの槍が獅子の横面を突き刺した。当然のように穂先が獅子の皮膚を貫くことは無い。

だが注意は十分に逸らせたようで、フィオの剣に押し掛かっていた体重が僅かに軽くなる。

その隙を逃さずフィオは重圧から抜け出すと、間合いの内側にすり入り込む。そして剣の柄で思い切り獅子の喉笛を突いた。

ガオオウツ！ と首を仰け反らせて獅子が吼える。

やはり皮膚の内側まで頑丈という訳ではないらしい。

漸く手応えを感じたフィオだったが、獅子はすぐさま体勢を立て直すと再び襲い掛かってきた。

「ちっ！ 何なんだこいつの硬さは！？」

「デイン！ こいつの注意を掻き乱してくれ！」

「あいよ！」

くるりと槍を回転させ、石突を前方に向ける。

デインガードは棍のように槍を持ち、巧みに突きを繰り出して獅子の注意をフィオだけに向けさせないようにする。

本来棍よりも長く重量のある槍をそのように使うのは難しい。長身のデインガードだからこそ出来る芸当だ。

フィオは柄を上手く利用しながら、刃こぼれしないように絶妙な力加減で剣を振るっていく。

ぴったりと息の合った二人の動きは獅子を見事に押さえ込んでいく。だが、それ以上の決め手が無いのもまた事実だった。

遠巻きにフィオらの戦いを眺めていたローエンは焦り気味に隣のユーリーを振り返った。

「どどどうしましょう！？ このままじゃ二人とも……！」

ローエンの言いたいことはユーリーにも解かった。

今は善戦しているが、決して状況が進んでいる訳ではない。このまま膠着状態が続けば消耗戦となり、決め手に欠くこちら側が不利

になるのは明らかだ。

だが、そうは言ってもどうすることも出来ないのだ。ローエンに戦闘手段があるとも思えないし、ユーリーがあの場合に乱入した所で足手まといにしかならないのは言うまでもない。

「あの、ユーリーさん。どうしても、魔法は使えませんか？」

「えっ？」

反射的にユーリーの心臓が跳ね上がる。だがそんなユーリーに構い無しにローエンは続けた。

「如何に防御力の高い魔物といえど、魔法まで防げとは思えませんが。風を操っているところから、恐らく宿っている魔力の属性も同じものでしょう。風属性には確か雷撃の魔法が有効だった筈……」

「ちよつ、ちよつと待ってよ！ 確かにそうだけど……でも、わたし……」

「お願いします！ 今この状況を打開できるのはユーリーさんしかいないんです！」

ローエンの焦りも解かるのだ。フィオ達がいれば次はこちらの番だろうし、何より教会の人間として託宣の“勇者”がこんなところで命を落とすのは非常にまずいことである。

無論ユーリーとて出来るならばそうしたい。誰がフィオ達を見捨てたくてそうするものか。

……しかし、

「……っ」

足が動かない。踏み出そうとしても、心が前へ行こうとしなかった。

怖い。怖い。

もし失敗したら？ そのことばかりが思考を埋め尽くす。

駄目だ。それじゃあ駄目なんだと無理やり一步を踏み出す。たつたそれだけで全身から汗が噴き出した。

浅く息を吐き出し、精神を集中する。

体内に宿る魔力の流れに意識を向け、震える唇で契約の言葉を紡ぎ始める。

《わ……我、求めるは嘆き貫く……、……っ！》

言葉に引き寄せられて集まってくる精霊の気配に、そして蠢きだす魔力の流れに、ぞわりと首筋が粟立つ。

——引っ張られる！

瞬間、一気に心が恐怖で満たされ、ユーリーは堪らず肩を抱いてその場に蹲った。

「ユーリーさん！」

「駄目！ だめ、やっぱり怖い！」

カチカチと奥歯を鳴らし、震える体を押さえつけるように強く掻き抱く。

「大丈夫です！ 魔法はそんなに恐ろしいものではありません！ 制御を誤るなんてことなんてそう起きることでは……！」

俯くユーリーの顔を覗き込むようにしてローエンが必死に彼女を

宥めかける。

だがユーリーは首を横に振って頑なにそれを拒んだ。

（駄目よ、危険すぎるわ！ やっぱりわたしが魔法を使うなんて無理だったのよ……！）

涙で滲む視界の先に、ぼんやりと記憶の風景が蘇る。

遠くから誰かの声が聞こえて、そちらに意識を取られた。

だから、その瞬間まで気付くことが出来なかった。

「ユーリーさん！！」

激しく揺り動かされ、ハツとして顔を上げる。

何故そんな状況になったのかは、一部始終を目撃していないユーリーにはすぐに把握できない。

だが少し離れた位置に崩れ落ちたように膝をつくディンガードとフィオがいて、彼らと対峙していた筈の獅子の魔物がこちらに向かつてきているのは理解出来た。

フィオが何か叫んでいる。

「あ……」

逃げなきゃ。

そうは思うものの、体が凍りついたように動かない。

隣のローエンも竦み上がってしまったようで顔面蒼白になりながら正面を凝視するばかりである。

獅子を中心に吹き出す風に身を任せて飛び退ろうとするも、風は突然向きを変え、今度は獅子を中心に吹き込むように奔り出す。

体を持っていかれないように踏み止まるのがやっとだった。

そうしている間にも、獅子はこちらに接近してきている。

剥き出しになった牙が、ユーリー達の体をより一層恐怖で縛り付けた。

（駄目、動けない……！）

咆哮と共に吐き出される息の臭いすら届きそうなくらいの距離。ユーリーは咄嗟に固く目を閉じた。

きつと次の瞬間には想像を絶するような痛みと衝撃がやってくる。しかし、それはいつまで経っても訪れなかった。

変わりに熱いものが降りかかってきたのは判った。

そういえばあまりに強すぎる痛みは痛覚が感じることを拒絶して熱さしか走らないという話を聞いたことがある。

それ程の痛みを受けたのかと思ったが、しかしそうではなかった。恐る恐る開いた瞼の外。視界の中に映った光景に、ユーリーは大きな青玉の眼を更に見開いた。

降りかかった熱は痛みが齎したものではなかった。

落ちる影に、苦痛の表情が滲む。

獅子の牙が貫いたのは、ユーリーの体でも、ましてローエンのもでもない。

獅子と彼らの間には、まるで瞬間移動でもしたかのように、いつの間にかフィオがその身を滑り込ませていた。

彼の細い肩に黄ばんだ犬歯が深々と食い込み、鮮血を撒き散らす。フィオの体が、僅かに傾ぐ。

「フィオ……！」

ユーリーの絶叫が祭殿内に響き渡った。

2・7：今、ここに理由

噴き出してはばたたと滴り落ちる鮮血が床に紅の華を幾つも咲かせる。

それを促すかのごとく獅子が顎に更なる力を加え、その度にフィオの左肩はぎしぎしと気味の悪い音を立てる。噛み砕かれないのが不思議なほどだ。

今にもユーリーの方へ倒れそうなくらい前傾姿勢になりながらも、フィオは背後の獅子を押さえつけるように最後の一线で踏み止まった。

「ぐっ……！」

苦悶の表情を浮かべながらもフィオは肩越しに獅子を睨みつける。ユーリーはフィオから獅子を引き剥がさねばと反射的に動きかけたが、しかしそうする手立てが思いつかず、腰を浮かせただけで終わる。

ローエンなどは恐怖と驚愕ですっかり固まってしまい、指の先すら動きそうにない。

だが二人が動くまでも無く、フィオは剣を逆手に握り直すと柄の底を力いっぱい獅子の鼻面に叩き付けた。

いくら皮膚が頑強と言っても衝撃には弱い。それは既に先程実証済みだ。

思惑通りギャンと跳ねるような悲鳴が上がり、瞬間牙の拘束が緩んだ。

その隙にフィオは身を翻し、倒れこむようにして獅子に体当たりを食らわせる。

さすがにバランスを崩して転がる獅子であるが、獣特有の身のこ

なしの軽さですぐに体勢を立て直してくる。

だが獅子の追撃は無い。その頃にはディンガードが追いついて、獅子の攻撃に文字通り横槍を入れていた。

獅子の注意がディンガードに逸れる。それと同時にフィオは堪らず剣を放り出し、崩れ落ちるように肩を押さえて膝を着いた。

「フィオ!!」

ユーリーは弾けるようにフィオの元に駆け寄った。ローエンもまた漸く金縛りが解けたかのように動き出す。

「フィオ! フィオ、大丈夫!? ごめんなさい、わたし達を庇って、こんな……!」

「フィオさん、今傷の手当を!」

涙を滲ませて案じてくるユーリーを、それを押しのけるように急いで手当てをしようとするローエンを、しかしフィオは片手を挙げて制した。

「大丈夫……ちょっと痛いけど、このくらいならまだ平気……」

「平気って、そんな訳ある筈ないでしょう!!」

「平気、だよ。オレ、体の丈夫さだけが取り柄みたいなもんだし」

蒼白な顔で力なく笑うフィオ。やせ我慢に決まっているとローエンは思った。

だが言い継ろうとするローエンを振り切るようにフィオは剣を捨て立ち上がり、瞑目して深呼吸すると視線を再び獅子へと向けた。

その行動が意図するところを汲み取ったユーリーは慌ててフィオを引き止めた。

「駄目よフィオ！ そんな怪我で動くのは危険だわ！ 無茶過ぎる！！」

「でも、デイン一人じゃあいつは抑えられない。早く行かないと、今度はデインが危ない」

激痛を必死に堪えているのか、フィオの呼吸は荒く、震えている。左肩の傷を中心に胴衣がどす黒い赤で染まっている。その袖口から零れた滴は腕に紅い筋を幾つも描いた。

未だ出血の止まらないこの状態で戦う方がよっぽど危険だ。ユーリーは追い縋るように胴衣の裾を掴んでフィオを引き留めた。

「逃げればいいじゃない！ それで、傷が良くなって、態勢立て直してからまた出直せばいいじゃない！」

あんな化け物を倒すことより、目の前の人間の安全の方がよっぽど大事だ。心からそう思った。

けれどフィオも退かない。真っ直ぐ獅子を見据える視線は、一部の揺らぎも感じさせなかった。

「あの獅子が言ってた……これは“試練”だって。だったら、今逃げたら、多分、オレには“勇者”を名乗る資格が無くなる。それじゃあダメなんだ」

「でも……でも、そこまで頑張る理由なんて……だって、貴方ただ指名を受けただけなんでしょう？ 実感だってしてないくせに、どうして、そんな……」

……どうしてそこまでする必要があるのだろうか。ユーリーは思う。

無茶を押し通す理由がユーリーには解からない。

ユーリー達を庇ってくれたのはこの少年の優しさ故だろう。だが、いくら他人を大事に思っても、果たして自分の危険を顧みず、己の身を投げ出せるものだろうか？

“勇者”だから？ しかし、フィオにそんな使命感も自覚もあるようには思えない。自らその実感が湧かないとすら言ったのだ。

託宣などというものが無ければ、片田舎でごく普通の少年として凡庸に生きていたであろう。

なのに何故、ただの少年であつた筈の彼が目前の敵から視線を逸らすことなく、自分の身も省みず、勝機も見えない戦いに挑もうとするのか。

すると、そんなユーリーの胸中を見透かしたかのように、フィオはその答えを口にした。

「……オレもさ、ユーリーと一緒になんだ。解かるよ。オレも、自分の力が怖い。振るつていいのか、出してしまつていいのか、躊躇う気持ち、解かる。でも、きっと、そこには意味があるって、思うから。きっと、これは誰かの役に立つものなんだって。……だから、オレは、信じるよ。自分の力を。そこに意味を与える為に。それを証明する為に」

フィオは一度だけ振り返って、不安げな表情のユーリーに笑いかけた。

屈託の無い笑みだった。

「その為に、オレは“勇者”になろうと思つたんだ」

そうして、ユーリーの手を優しく振り解いた少年は黒髪を靡かせ、再び獅子へと立ち向かっていった。

その背姿を、ユーリーは呆然として見送った。
宙に浮いたままの手が震える。

——そこに意味を与える為に。それを証明する為に——

（ああ、そうだわ）

手を握って胸元に引き寄せる。そこから伝播したように丸めた肩が震えた。

（わたし、その為に、ここに来たのよ）

己に宿る力に意味を与える為に。それを証明する為に。
記憶の底から湧き上がる声が仮想の耳朵を打つ。

——ユーリー、お前が魔法を使う必要は無い。使ってはいけな
よ。いいね？

敬愛する父は常よりそのように娘に言い含めていた。

魔道に携わらずとも家督を継ぐ上では何ら問題ないと彼は言った。
けれど、ユーリーはいつも疑問に思っていた。

カイザード家は古くから続く魔道の大家だ。歴代の当主を始め一
族の人間の大半が王国の魔道研究に携わってきた由緒ある家柄であ
る。

物心ついた時からずっと、そのことを誇りに思っていた。この家
に生れ落ちたことを誉れ高く思い育ってきた。

だというのに、両親はユーリーを魔道から遠ざけようとした。
その理由は、ユーリーにも理解できた。けれど、納得は出来な

った。

魔力を一切持たずに生まれてきたというならばまだ諦めがついただろう。

だがユーリーには魔力があるのだ。充分過ぎる程に。

魔道の名門に生まれ育ち、魔道士としては申し分ないだけの魔力を持ちながら、魔道に触れることを許されないこの境遇に、ユーリーは納得出来なかった。

——だって、そうしたら、わたしの内にあるこの力には、一体何の意味があるというの？

——魔法を使えないわたしは、何の為に、この家の子として生まれてきたの？

親を悲しませたい訳でも、周りを困らせたい訳でもない。

ただ、知りたいと願った。力の意味を。

そして、意味を与えてやりたいと思った。無意味なものなどではなく、誰かの役に立つ、誇るべきものであると、証明することを望んだ。

その願望が意思となり、今、ユーリーはこの場所に立っている。

さあ、思い出せ。自分は、何の為に此处に来た？

それを成し得るのは、誰だ？

——オレは、信じるよ。自分の力を——

蘇る声に肩の震えが止まる。それと同時に急速に現実感が戻ってきた。

立ち上がりながら俯いていた視線を前へと向ける。

吹き付ける強風に、高く結い上げた鮮金色の髪が大きく翻る。

けれどユーリーは視線を逸らすことなく、翡翠の鬘たてがみを揺らす獅子

を、応戦するフィオ達を真っ直ぐ見つめた。

さあ、思い出せ。

その力は、何の為にある？

「ローエン」

「っ？ 何でしょう？」

「暴発して巻き込んで、恨まないでね」

思いも寄らない発言にローエンがぎょつとした表情で見てる。

ユーリーは緊張した面持ちで——けれど、強い決意を秘めた眼差しで、ローエンを見返した。

そして、一つ深呼吸して、ゆっくりと両手を前に突き出す。

臉を落とし、ユーリーは静かに契約の言葉を紡ぎ始めた。

《我求めるは嘆き貫く堇橙^{きんとう}の槍。雷精サンダストエーリよ、汝の手足を我に与え給え》

浮き上がる無数の橙色の光。言霊に惹かれて雷精が周囲に群がってくる。

その精霊に引かれるように、或いは精霊が引き寄せるように、蠢きだした内在魔力が一気に膨れ上がり抛り所を求めて彷徨いだす。

予想以上に急激に高まっていく魔力に、一步下がって見ていたローエンは驚愕と戦慄に目を見開いた。

（っ……く！ 振り回される……！！）

まるで暴れ馬の手綱を握っているようだ。

自身が意識するよりも遥かに大量の魔力が体外へ溢れ出る。手を

放せば好き放題に魔力を取り込んだ精霊が過剰に元素を生み出し、余剰元素は支配下に無い魔力と結合して暴発を招くだろう。

制御しきらねばならない。ユーリーは歯を食いしばって、全身から噴き出しては今にも暴走しそうな魔力を無理やり抑えつけた。

《原野を越え、裾野より立ち昇りし業は天険^{てんけん}を貫く。来たれ……っ》

息と共に続く言葉も飲み込んでしまう。

体が重い。突き出した両腕が気だるさで沈みそうになる。

逸らすまいとしていた視線は、いつの間にか下りた瞼に遮られていた。

（駄目……重い、堪えきれない……！）

心が、精神が一秒よりも速く削られていく。今すぐにも魔法を放棄したい。楽になりたい。そんな欲望が、顔を覗かせる。

魔法を操るのに必要なのは体力よりも術者の精神力である。

心が折れるということは即ち制御を放棄することである。抑制を失った魔力は直ちに暴走を開始するだろう。

——お前は、その力を使うべきではない。

頭の奥から蘇る声が、挫けかけたユーリーの心を奮い立たせる。

それでは駄目だ。諦めちゃ駄目だ。負けるな。

刻み込め。決して忘れぬように。いつでもその決意を胸に。

信じるんだ、自分の力を。それを否定してきた者達に、今こそ証明して見せる——！

（大丈夫……だってこれはわたしの力！ 自分の言うことを聞かない手足なんて、無い！！）

カッと目を見開く。

ユーリーは暴走しようとする強大な魔力を無理やりねじ伏せると最後の言葉を紡ぎ、今、魔法を編みきつた。

《来たれ、天譴てんけんの槍。円天えんてんより再び方地ほうちに降り注ぎ、其の報いとなれ……！！》

ローエンが叫ぶ。

喚起の声で状況を察知したフィオとディンガードが素早く獅子から離れるのとユーリーが契約の言葉を結んで魔法が発動するのは殆ど同時だった。

《サンダーボルト・スピアー……！！》

刹那、視界が真っ白に塗り潰される。

叩きつけられるように降り注いだ青白い閃光の束が獅子の体を貫く。遅れて耳を劈く雷鳴音かみなりが獅子の咆哮と混ざって祭殿に轟いた。

魔法の余波と風とが獅子を中心に放射線状に奔り、フィオ達は避ける間もなくともに食らい吹き飛ばされる。

比較的后方にいたユーリーとローエンは両腕を盾に顔を庇うようにしてそれを堪えきる。

激しい耳鳴りが漸く収まってきた頃、祭殿内は静寂に包まれていた。

呼吸音だけが室内に反響する。

雷撃魔法に貫かれた獅子は祭殿の中央にぐったりと横たわっている。

誰かがホッと息を吐きかけたその時、床石の崩れる音に再び緊張が走った。

揺らめくように獅子がその身を起こす。その動きは酷く緩慢で、

雷撃で負ったダメージの大きさを思わせる。

しかし獅子は満身創痍でありながら、その眼光に揺らぎは窺えない。それが唯一の使命であると言うように、一歩、また一歩とフィオの元へ近づいていく。

デインガードが援護に向かおうと走りかけたが、フィオはそれを視線だけで制した。

だらりと下ろした剣の切っ先を持ち上げ、左手を添える。

まるでフィオが構えるのを待つかのように獅子は一瞬立ち止まり、それを見届けると一気に踏み込み、距離を詰めた。

咆哮と共に顎門^{あぎと}が開かれる。人一人など優に丸呑みできそうな大きさだ。

頭から噛み付かんと飛び掛ってきた獅子を、フィオは一步も動かず待ち構えた。

そして上顎が頭上を越えたかと思われた刹那、フィオは獅子の咽喉目掛け思い切り剣を突き出した。

獅子が顎を下ろすよりも早く、フィオの剣が獅子の喉を刺し貫く。

ゴガガアアアア！！！！！

断末魔が上がる。

獅子が剣を喉に突き刺したまま仰け反り、苦痛にのた打ち回ると同時にフィオも後ろへ一歩跳び退る。

獅子は真っ赤な血と唾液を吐き散らしながら、やがてぴたりと動きを止めた。

もうそれ以上獅子が動き出すことはなかった。

2 - 8 :そして世界は拓かれた

床に倒れ伏す獅子。静寂が祭殿内を満たす。

フィオは獅子がもう起き上がってこないのを確認すると漸く警戒を解き、剣を鞘に収めると膝に手を着いて大きく息を吐き出した。忘れていた疲労感が込み上げてくる。

「フィオ、大丈夫か？」

獅子の様子を気にしながらディンガードが駆け寄ってくる。ディンガードに釣られるように、呆けていたローエンも慌ててこちらに走ってきた。

それにフィオは身を起こしながら大丈夫と短く応える。

「アホ。大丈夫な訳あるか。肩見せろ、肩」

傷の心配をしながら人の頭を叩くのは一体どういうことだろう。じわりと滲む頭頂部の痛みと若干の理不尽さを感じながら、しかし苦笑を浮かべてフィオは言われるがまま負傷した左肩をディンガードに差し出す。

漸く追いついたローエンが手を出すよりも速くディンガードは腰のポーチから布切れを二枚取り出し、一枚を折り重ねて服の上から傷口に宛がうともう一枚の布切れを包帯代わりにぐるぐると巻きつけていく。

「痛い。もうちょっと優しくしてよ」

「無茶なお前が悪い。嫌なら怪我すんじゃない、馬鹿」

傷口を圧迫するように巻きつけた布の端がぎゅっと固く結ばれる。その衝撃と、ディンガードが終わったぞと言ってバシンと叩いてきた左肩の痛みにフィオは思わず悲鳴を上げた。

「痛いってば！」

「おー良かったなあ生きてる証拠だぜ」

フィオの抗議にいけしゃあしゃあと答えるディンガードである。傍から見ているローエンははらはらしっ放しだ。

（何て乱暴な……）

内心そう思いながらも口には出さないのがローエンが小心者たる所以である。ゆえん

しかしながらフィオもそんなディンガードの性格は心得たもので、手当てそのものに文句はつけなかった。

「フィオさん、本当に大丈夫ですか？ 一応、止血の魔法なら使えますが……」

暗に手当てをやり直そうかと申し出たローエンだが、フィオは首を横に振ってそれを断る。

「ありがとう。これで十分だよ。まあ、そんなに深い傷でもないし」

深い傷じゃない？ そんな筈は……と、ローエンはあの時のことを思い出しながら考える。

あまり鮮明には覚えていないが、少なくともあの出血量で軽傷と

いうことはないだろう。

こんな時に強がり言って遠慮する必要なんて無いのにとローエンは思ったが、フィオの興味は既に肩の怪我から別のものへと移っていた。

「ユーリー、大丈夫？」

フィオがユーリーの元へぱたぱたと駆け寄っていく。

ユーリーはというと、ぺたりと床に座り込んだまま放心している。フィオに続いてローエンとディンガードもユーリーの元へと近づくが、ユーリーは彼らのことなど眼中に無いといった風に震える両手の平を見つめていた。

「ユーリー？」

「……きた……」

「え？」

「出来たああーっ！……！」

弾けるように突き出されたユーリーの拳が、奇しくも訝しく思っ
て屈んだフィオの顎にヒットする。

「っだー！……！」

拳が当たった拍子に舌を嚙んだらしい。フィオは悲鳴を上げてその場に蹲った。

しかしユーリーはそれに全く気付かず、歓喜のあまり痛みに肩を震わせるフィオの背中に思い切り抱きついた。

その衝撃で左肩に激痛が走り、フィオが更に悶絶する羽目になったのは言うまでもないだろう。

そして当然のように、ユーリーはフィオの異変に気付かない。

「出来た！ 出来たわフィオ！！ ほら、わたしにもちゃんと魔法は使えるのよ！！ あはは！」

「いだい……！ ちょ、ユーリー！ 放して！ 痛いつてばあ……！！」

「ありがとう、フィオ！ 貴方のお陰よ！ わたしでも魔法は使えるって、証明出来た！」

涙声で訴えるフィオの主張も虚しく、ユーリーは更に抱きつく腕に力を込めた。

そのきっかけを与えてくれた少年に、全霊の感謝を伝えるようにそれが解かったのか、フィオも抵抗するのをやめて彼女の好きにさせた。

「良かったね、ユーリー」

肩越しにユーリーに微笑みを向ける。

ユーリーは何度もありがとうと繰り返した。

「おいコラ、お前。 いい加減放せ。 傷に障るだろうが」

デインガードが苛立たしげにユーリーの頭を引っ掴んで無理やりフィオから引き剥がす。

その扱いにユーリーは少々不満げだったが、漸く解放されたフィオは肩を竦めて苦笑するだけだった。

「なによー、折角人が喜びに浸ってるっていうのに」

「怪我人相手なんだから少しは手加減しやがれ」

「そうだわ！　フィオ、貴方傷は大丈夫なの！？」

今の今までそのことをすっかり忘れていたらしく、ユーリーの態度が一転する。余程魔法が使えたことが嬉しかったのだろう。フィオは平気だと言って大きく頷いて見せる。

「大した怪我じゃないし、手当てしてもらったからもう大丈夫」

「そう……それならいいんだけど。それにしても身を挺して庇うなんて、本当に無茶だわ。その程度で済まなかったらどうするつもりだったのよ」

「あははー」

誤魔化し笑いを浮かべるフィオを、胡乱な目つきで見てくるユーリー。

きっと彼女なりの感謝と心配の表れなのだろう。……が、さすがに居心地が悪くなって、フィオは慌てて話題を変えた。

「それよりも早いところ祭壇の間に行こう。まだ本来の目的を果たした訳じゃないんだしさ」

「そうですね。風精の長に会わなくては」

「そうよ、わたしも風精の長と契約を結びに来たんだっただけ！」

ローエンが同意を告げてくれたことでユーリーの意識も上手くそちらへ流れたようだ。

内心ホツとしつつ、フィオは改めて奥の扉の向こう側へとつま先を向けたのだった。

*

祭殿の奥の扉を開くと一際強い風が吹き込んできた。

先程魔物が操っていた魔法の風とは違う、外気を孕んだ自然の風だ。

扉の向こう側は屋外となっており、その先から円台の上に設えられた吹きさらしの祭壇まで短い廊下橋が架けられている。

今にも崩れ落ちそうな雰囲気はあったが、やはり見た目以上に頑丈なようで普通に歩いてみても揺らぎそうな気配は無かった。先程のような襲撃がまたあるとも限らないので慎重に歩を進める。しかしそれは杞憂で済んだようである。一行は何事も無く祭壇の前まで辿り着いた。

「ここで風精の長に会えるの？」

きよろきよろと周囲を見渡しながらフィオが誰にと無く尋ねる。祭壇の間にはそれ以上何も見当たらない。相変わらず強い空風が吹くばかりで、何者かの気配があるようにも感じない。

日は既に沈みかかっている。西の空が燃えるように赤い。東の空には夜の帳が広がりつつあった。

「その筈なんですが……」

ローエンもさすがに首を傾げる。

この場所が終点なのは確かだ。ここに来れば風精の長に会える筈である。

だが、肝心の『どうすれば会えるのか』の部分まではローエンも知らなかった。というより、辿り着きさえすれば自動的に接触出来るものと思っていたのだ。

答えに窮してユーリーの方を見ようとした瞬間、空気が変わった。祭壇の間を横薙ぎに吹き抜けるように吹いていた風が止まり、中央の祭壇から放射線状に大気が駆け抜ける。

『わたしに御用ですか？』

突然届いた柔らかい声に、四人が手をかざして風を避けながら一斉に祭壇の方を向く。

祭壇の上部に翡翠色の光の粒子が収束していき、大きな塊となったかと思うと次の瞬間光が破裂するように拡散し、入れ替わるように一人の女性が現れた。

周囲を漂う翡翠色の光の球と同色の長髪が風を含んでさらりと摩く。

長い睫毛に覆われた瞳もまた碧く、優しい色を湛えている。

白磁のように滑らかな肌の上に白い天衣を纏ったその女性は、祭壇の上にふわりと浮いたまま温かい眼差しで四人を見下ろした。

『よく来ましたね、ノアの託宣に読まれし“勇者”』

「あなたが、風精の長……？」

『はい。風精の長シルフォルフと申します』

目をぱちくりさせるフィオ達に、風精の長シルフォルフはにこりと笑いかけた。

『精霊が人の形をしているのは意外ですか？』

二の句を告げないでいる理由を悟ったのか、シルフォルフがくすくすと笑う。それに何も考えず、フィオが素直に頷くとユーリーに肘で小突かれた。

それを見てシルフォルフがまた笑う。

「すみません、長。彼らは精霊のことをあまり知らなくて」

『よいですよ。無知を知ることまた、知への道です』

ユーリーが慌てて弁明をしている間に、フィオはローエンにこっそり話しかけた。

（精霊つてもっと厳つい感じなのかと思ってたけど、人間みたいなんだね）

（精霊自身のランクや属性によっても違いますけどね。上位になるほど形状が人型に近くなるんです）

（へえ〜）

「そこ！ 私語しない！」

怒られてしまった。

精霊の長の手前、失礼があつてはいけないと思っているのだろう。フィオは改めてシルフォルフと対峙すると、一礼してから名乗った。

「託宣の“勇者”フィオ・ノークスです。預言に従い、風精の長の御力を借りに来ました」

「ええ、解かっています。……遂に、時が来てしまったのですね……」

シルフォルフが彫刻のように美しい顔を悲しげに歪める。そして、憂いに伏せられた目蓋が持ち上げられると、形の良い桜色の唇が驚くべき言葉を紡いだ。

「フィオ、残念ですがまだ貴方に力を貸す訳にはいきません」

「えっ!？」

口々に驚愕の声が漏れる。まさか断られるなどとは誰も思っていなかったのだ。

シルフォルフは静かな口調で続けた。

「フィオ、先程の試練を覚えていますか？」

「試練？ あの獅子の魔物との戦闘ですか？」

ついさっきまで戦っていた獅子のことを思い出す。

獅子は確かに言っていた。《試練を受けよ。その資質を示せ》と。シルフォルフが大きく頷く。

『そうです。あれはわたしが貴方の資質を測る為に放った使者。貴方の戦いぶりは、見事でした。託宣の“勇者”としては申し分ないでしょう。……しかし、試練の意図までは読みきれなかったようですね』

「どういことですか？ あれでは駄目だと？」

『フィオ、今の貴方は未熟です。命運を背負う“勇者”としても、また人としても。わたしの力を授けるには、今の貴方ではあまりにも足りないものが多すぎます』

フィオは愕然と風精の長を見上げた。

“魔王”を打ち滅ぼす為には精霊の長の力を得なくてはならないのに、自分にはその資格が無いなんて。

きつぱりと言い切られた衝撃に打ちひしがれていると、そんなフィオの胸中を慮ってか、シルフォルフが優しく微笑みかけてきた。

『確かに、貴方は未熟です。しかしそれは、貴方が未だ世界を知らないから。——フィオ、世界を知りなさい。その足で大地を踏みしめ、両腕に風を受け、世界を巡りなさい。今の貴方は知らないことがあまりに多い。物に触れ、人に触れ、多くの思いに触れなさい。その果てに、貴方はこの試練の意図を知るでしょう。その時こそ、貴方に“勇者”としての資質を認め、我が力の結晶、“風の宝珠”を与えましょう』

「……それが、本当の“風の試練”？」

シルフォルフは笑いをもって肯定を示した。

『わたし達が貴方に与える力は本来人が持つべきものではありません』

ん。故にその資格を測る為、貴方に試練を課すのです。この先貴方が会いに行く他の精霊の長達も皆貴方に試練を課すでしょう。そしてその多くは、相手を打ち倒す強さを求めるものではないということ覚えておきなさい。わたし達が求めるのは、心の強さ。彼らが求める心の資質を示しなさい』

「……解かりました。どうすればいいのかはまだ分からないけど、それを知ることと試練の内なんですね」

『その通りです』

フィオは拳を強く握って震えだしそうな体を押さえつけた。
未だ見ぬ世界への期待か、それとも不安か。

するとシルフォルフが細い腕をするりと伸ばし、フィオの頬に触れてきた。

温度の無い奇妙な感触。けれど何故かそこから温かみが伝わってくるようだった。

『新しい“勇者”、勇神フィオの名を冠する子……貴方の先行きに、女神の戯れが宿らぬことを祈ります』

不思議な祈りの言葉にフィオは首を傾げたが、シルフォルフは少し悲しげに微笑むだけで何も言わず、そつと手を離れた。

『わたしもまた世界を廻り、遙か天空の果てにて再び貴方^{まみ}に見える日を待ちましょう。その時を楽しみにしています』

「はい、ありがとうございました、シルフォルフ」

フィオが深く頭^{くぶ}を垂れるのを見届けると、シルフォルフの周りに

漂う光の球が徐々に大きく膨らみ、比例するように彼女の体が実体を失っていく。

立ち去りかけた風精の長に、ユーリーが慌てて追い縋る。

「シルフォルフ、待ってください！」

『？ まだ何か御用かしら』

光の球が沈静化しシルフォルフが再び実体を取り戻す。

ユーリーは決意の眼差しでシルフォルフを見上げた。

「わたしはユーリー・カイザード。貴女と契約を結ぶ為にここまで参りました。どうか、わたしと盟約を結んでは頂けないでしょうか」

飾り気も何も無い、真っ直ぐな言葉。

思いも寄らない台詞にさすがのシルフォルフも驚いたのだろう。

目を見張るようにしてユーリーを見ていた。

「魔道士として未熟なのは解かっています！ でも、わたしにはどうしても精霊との盟約が必要なんです。どうか、どうかお願いします……！」

フィオ達はその様子を固唾を呑んで見守っている。

ユーリーの必死の嘆願は、しかし首を横に振るシルフォルフによって敢え無く散った。

「やはり……わたしでは、盟約を結ぶに足り得ませんか？」

『ユーリーといいましたね。貴女の思いは伝わりました。ですが、貴女が契約を求めるべきはわたしではなく、また、今という時でも

ありません』

「えっ？ それはどういう……」

『いずれ貴女が心の底から契約を必要とする時が来るでしょう。その時、貴女が契約すべき相手が誰なのかは自ずと知れること。その訪れまで、貴女もまた心を磨きなさい。重圧にも負けない、強い心を』

真意を測りかねて戸惑うユーリーに優しく微笑みかけながら、シルフォルフは今度こそその姿を消した。

風の流れが、再び横薙ぎに戻る。

取り残された少年達と少女は、暫し呆然と何も無い空間を見つめ続けた。

3 - 1 : “勇者”、窮地に立つ

夜中の移動は危険であるとの判断により、フィオら一行はその晩を遺跡の中で過ごして翌朝セルンの町への帰途に着いた。

ローエンとユーリーは初めフィオの負った傷の具合を案じていたが、一方でデインガードが何事もなかったように振舞うし、当のフィオも怪我をしていることなどまるで感じさせない機敏な動きで昨日同様容易く敵の群れを蹴散らしていくので、その心配が杞憂であると思うようになり、町に着く頃にはそんなことなどすっかり忘れてしまっていた。

セルンの町は相変わらず静けさに包まれており、昼過ぎというのに道行く人影も疎らである。

一行は馬を外に繋ぎ止めると閑古鳥の鳴いている酒場に入り、堂々真ん中に陣取っては少し遅い昼食にありついたのであった。

「それにしても困っちゃうわよねえ。お互い当てが外れるなんて」

フォークでサラダの野菜を突きながらユーリーが溜め息混じりに言う。

咀嚼したパンを飲み下し、フィオは苦笑と共に小さく息を吐いた。

「まあ俺の場合は試練続行みたいな感じだし、ユーリーだってまた別の精霊と交渉しに行けばいいんじゃない？」

「そうなんだけど……その精霊に会うつていうのが大変なのよ。高位の魔道士ならその場に召喚するつていう手も使えるけど、わたしには出来ないし。風精ならライレキア国内に御所があるから丁度いいと思ったのに」

「他の精霊の長はライレキアの外にいるの？」

「そうよ。つて、知らないの？」

ユーリーがどういうことだと尋ねるようにローエンに視線を送る。ローエンは諦観の表情で首を横に振って見せた。

教えた筈なんですけどねえというローエンの心の嘆きが聞こえるようである。

ユーリーは呆れたように肩を竦め、フィオの疑問に答えることにした。

「精霊の長が棲む御所と呼ばれる場所はそれぞれの力の均衡を保つ為にシルメリアの各地に散らばっているの。地精は南にある南方連合の大森林帯に、雷精は北のグラネーシュ自治区を横断するドーガ山脈、水精は海を越えた先、カミューア大陸南東の国エストラスに……つていう具合にね」

「全体的に東側に偏つてんじゃねえか。バランス悪くね？」

横からデインガードの鋭いツツコミが入る。

ユーリーは一瞬ムツとした表情を見せたが、短く咳払いをすると気を取り直して彼の言葉に答えた。

「御所を二つ持つ精霊もいるのよ。風精もセレメシオの風の遺跡以外にもう一つ、カミューア南西にあるソフィア王国に御所があると

言われているわ。全体的に見ればちゃんと均衡は取れているということね」

「ひょっとしてシルフォルフがもう一度会おうって言ってたのって、そのソフィアにある御所でってことなのかな？」

フィオは遺跡での風精の長とのやり取りを思い出しながらそう呟いていた。

多分そうでしょうね、とユーリーが頷いて見せる。

「フィオが最終的に目指さなきゃならない場所は“魔王”のいる西の地でしょう？ それなのに他の精霊の御所を巡ってまた風の遺跡に戻るのでは時間の無駄なもの。一刻も早く世界を救済しなくちゃならない人にそんな手間を掛けさせるようなことはしないと思うわ」

「そもそもこの試練ってやつが手間だと思うんだけどな」

「デインガード、いちいち口突っ込まないで」

「へーへー」

ユーリーがさすがに我慢しきれず睨みつけるとデインガードはぷいと顔を背け、やさぐれたようにパンをかじり始めた。

その様子にフィオは思わず苦笑を洩らしていた。

元々周囲に対し斜に構えた態度を取りがちな男ではあるが、どうにもそれがユーリーに対しては顕著なようである。

散々お化け嫌いをからかわれたことへの仕返しなのか、何にせよ子供じみた反応だ。

昔から何一つ変わらない幼馴染の様子に、フィオは可笑しさと同時に言い知れぬ安心感も覚えていた。

悪びれもしないディンガードの態度が気に食わないらしいユーリーは更に噛み付こうと腰を浮かしかけたが、さすがにローエンが間に割って入り宥めに掛かる。

「まあまあ。食事は和やかに楽しみましょう、ね？」

「……まあいいわ。ええと、何の話だったわけ？ ああ、そう、精霊の御所の話よね」

ホツと胸を撫で下ろすローエンである。外野のフィオはその様子が面白くて小さく笑いを吹き出した。

「まあそつという訳で、精霊の長の御所を訪ねるっていうのは結構大変なのよ。遠いし、道だつて険しいし。だから近場の風精でどうにかしたかったんだけど……はあ、困ったわ」

ふうと大きく溜め息を吐き出すユーリー。突いていた野菜はすっかりしなつてしまっている。

フィオは燻製肉を口の中に放り込みながら一瞬思案を巡らせた。

「一度家に戻るっていうのは？ それからまた考えればいいじゃない？」

何も単身で旅を続けることはない。一度実家へ戻って供を連れてからまた改めて旅に出ても遅いということはないだろう。

彼女の安全を考慮しての提案だったが、しかしそれは即座にユーリーに却下されてしまった。

「駄目、無理。わたし魔法を使うの親から禁止されてるし、第一家出同然で出てきたんだもの、今実家に帰ったら絶対にもう二度と家

の外に出してもらえないわ」

「う、うん、それは困ったね……」

それでは確かに帰るといふ選択肢は無いだろう。

だが、だからといってこのままユーリー一人で他の精霊の御所に向かうのはあまりに危険である。

どうしたものかとフィオまで頭を捻っていると、何か閃いたのか、ユーリーがポンと両手を打ち合わせた。

「あ、そっか。このままフィオの旅に同行すればいいじゃない」

「あ、その手があったか。……つて、えええええ！！！！！……」

驚きの声を上げたのはフィオだけではない。ローエンばかりか、我関せずといった態度のディンガードまで目を剥いてユーリーを振り返っていた。

「そうよね、フィオは精霊の御所を回らなきゃならないんだもの。一緒についていけば必然的に長にも会える訳だし、身の安全も守れるし、一石二鳥！ 何で早くそこに気付かなかったのかしら！」

「え、えええ……」

予想外の展開に異議を唱えることも出来ず戸惑うフィオを尻目に、素晴らしい名案だと一人ではしゃぐユーリー。

さすがのディンガードも二の句を繋げるのに苦労したようである。

「おい待て。あのな……すぐその遺跡まで同行するのは訳が違うんだぞ。お前、意味解かってんのか？」

「そ、そうですよ！ 仮にも“勇者”の旅なんですから、それを疎む魔族からどんな妨害があるかも判りませんし、危険すぎますよ！」

ローエンもこれにはさすがに同意しかねるらしい。この時ばかりはディンガードの側に立って彼の言を補った。

だがそう簡単に引き下がるユーリーではない。

二人に用は無いと言わんばかりに引止めに掛かる彼らの言葉をすっかり無視し、ユーリーはフィオのみにターゲットを絞るように彼の手を強く握って説得しだした。

「フィオ、わたしこのままじゃ帰れない。精霊と契約を結んで、ともに魔法が使えるようにならなきゃいけないの。危険なのは承知の上よ。出来る限り足も引つ張らないようにする。だからお願い、一緒に連れて行って……！」

「でも……」

「お願い……！」

ずいとい顔を近づけられ、思わず後ずさろうとする。が、手をがちり掴まれているお陰でそれ以上逃げられない。

吐き出す言葉が見つからず、言葉と共に息が詰まる。

息苦しさで真っ直ぐに射抜くような懇願の視線にフィオはとうとう耐え切れなくなり、盛大な溜め息と同時に承諾の意を吐き出してしまった。

「……うつ、しょうがない……」

「本当！？ やったあ……！」

「ちよつ……！　おいフィオ！　何簡単に負けてんだよ！　俺は認めねえぞこんな奴……！」

押し切られたことにながつくりと肩を落とすフィオとは対照的に諸手を挙げて喜びを顕わにするユーリー。

すかさずディンガードが食って掛かるも、ユーリーは勝ち誇ったような笑みでそれをあしらった。

「別にディンガードなんか認められなくても、“勇者”でこの旅のリーダーであるフィオが認めてくれたんだから全っ然問題ないわねえフィオ……」

「てめえが無理やり承諾させたただけだろうが！　おいフィオ、こんな奴の言うことなんて聞かなくていいぞ！」

「えええ、でも……」

「フィオ……貴方、仮にも“勇者”のくせに一度出した決定を取り下げるっていうの？　そんな優柔不断さで“魔王”が倒せるとでも思っているの……？」

「お前、俺よりこんな奴の意見を尊重するってのか？　お前が生まれた時からずっと一緒にやってきた俺よりほんの二日前に出会ったばかりの女を取るっていうのか……？」

「あの、話が飛躍しすぎでは……」

「ローエンは黙ってて……」「教会野郎は黙ってる……！」

「えええー！！！！？」

「どうなの！？ フィオ！」

「どうなんだよ！？ フィオ！」

「うええええ……」

ローエンの扱いのぞんざいさはさて置くも、これ以上に無いくらい
の窮地である。

あつちを立てればこっちが立たず、こっちを立てればあつちが立たず……。

困った。非常に困った。

答えを迫るユーリーとディンガードの視線に耐えかねて、フィオは思わず天を仰いだ。

そして、僅かな逡巡の後、フィオはやつとの思いで二人に向き直った。

「……まあ、特別な問題がある訳でもないし、ユーリーも危険を覚悟の上みたいだから、いいんじゃないかな……」

殆ど諦めのような言葉である。

だがそんなものでもユーリーを狂喜させ、ディンガードを激しく落胆させるには十分なものだった。

「ありがとうフィオ！ さすが“勇者”！ 話が解かるわあー！！」

「……フィオ、てめえ、俺を裏切ったな……」

後で覚えてろよと言わんばかりのディンガードの恨めしげな目が

非常に痛い。

助けを求めるようにローエンを見たが、ローエンはローエンで二人に一斉に邪険にされたことが相当ショックだったらしい。こちらに背を向け、すっかり項垂れてしまっている。

——どうしろっていうんだよ……

フィオは最早、引きつった笑いを浮かべることしか出来なかった……。

3 - 2 : 見捨てられたもの

一騒動(?) あった昼食も漸く終わると、一行は食後のお茶を傍らに休憩がてら今後の進路について話し合うことにした。

ユーリーはお茶で口を湿らせつつ単刀直入にローエンに尋ねる。

「それで、次はどこへ向かうつもりなの？」

「このまま南下して、南の地精の御所を目指す予定です」

「地精…… 調べてことは南方に入るのよね？ 大丈夫なの？」

精霊の御所全てを回ることを考えればそれが最も効率的なのは分かるが……とユーリーは暗に不安を示唆して訊ねた。

するとローエンもユーリーの内心を汲んだのか、苦笑を浮かべて答える。

「懸念要素は尽きませんが、仕方がないでしょう。ここだけ避ける訳にもいきませんし。なるべく大きな町を通るようにすれば大丈夫だとは思っていますが」

「まあ、そうなんだけど…… ううん、やっぱりちよっと心配よね」

あの土地に足を踏み入れることを考えるとさすがに気が滅入る。

ローエンと二人して微妙な表情を浮かべっていると、視界の端に首を傾げてお互いに眼を見合わせているフィオとディンガードの姿が映った。

何だろう、と一瞬思ったが、ユーリーはすぐにその理由に気付いた。

「二人とも、ひよつとして南方のこと知らない？」

「うん、全然。ていうか南方って何？　って感じ」

はは、と呑気な笑みを浮かべるフィオに、ユーリーは確信を得る。そういえば二人はライレキアでも田舎の出身だ。自国のことすら覚束ないのに余所の国の事情など知る筈もない。

そんな世間知らずの新米“勇者”とその幼馴染に、ユーリーはなるべく簡潔に説明を始めた。

「南方……正式には“南方連合”^{なんぽうれんごう}という国ね。文字通りラトラディク大陸の南部地方に広がる独立国家で、ライレキアとは隣国として付き合いの深かった国よ」

「深かった、って過去形かよ」

「長い間国交が途絶えていたのよ。南方で内乱が起きてからね」

人差し指をぴんと立てて二人の注目を寄せる。

「百年ぐらい前に内部紛争が勃発して中央議会などの中枢機関が壊滅してしまったの。南方は昔から来るもの拒まず去る者追わずっていう自由な国風で有名なんだけど、そのせいで多くの無法者を抱えることにもなっていてね。それでも中央議会があつた頃は治安もきちんと保たれていたのだけど、議会が無くなって実質無政府状態になつてからは各国から流れ込んだ犯罪者や極悪人が自由に闊歩^{かつぽ}するような国になつてしまったのよ。それが火に油を注ぐことになつた

のか、何十年もの間争乱が続いたと聞いているわ」

「始めはライレキアなどの諸外国も内乱の収束に協力姿勢を見せていたそうですが、その甲斐も無く事態はどんどん泥沼化していつてしまい、もう手が出せないくらいになってしまったそうです。最終的には各国間で南方連合国への入国及び同国からの出国を原則禁止するなんて法令まで出されたくらいですからね。筆舌に尽くしがたい程の惨状だったのでしょう」

ローエンがお茶を喉に流し込みつつ言葉を繋ぐ。
ユーリーもそれに頷いて解説を続けた。

「実際南方との国境線上には無断で越境する者がいないようにって巨大な壁が築かれたくらいだしね」

「それって完全に見捨てられてんじゃねえか、南方の連中。要は臭いものには蓋をしるって理論だろ？」

ディンガードが渋面で指摘する。

う、と一瞬ユーリーは言葉を詰まらせたが、すぐにそれに反論する。

「仕方がないでしょう？ 他国での紛争の為に自国民まで危険に晒す訳にはいかないわ。必要な措置だったのよ」

ふうん、と納得がいけない様子で目を眇^{すが}めるディンガードに更に言い募ろうとしたユーリーだったが、それを遮るようにローエンが口を挟んだ。

「ディンガードさんの仰る通りです。どうすることも出来なかった

とはいえ、諸国は南方連合を見捨てました。それは事実です。しかし、過ぎてしまったことを今あれこれと言っているも仕方がないと思いませんか？」

諭すようなローエンの言葉にディンガードは不機嫌そうな様子でぶいとそっぽを向いてしまう。

また何か噛み付いてくるかと思っていたので肩透かしを食らったような気分だが、まあこれ以上ぶつくさと言われても話が進まないのもこの方が良かったのだろう。

気を取り直し、ユーリーはフィオに向き直った。

「——そういう訳で、南方ってすごく危険な国なのよ。一応何年か前に内乱が収束してやっと中央議会が復活したらしいけど、そんなすぐに治安が回復するとは思えないし。噂じゃ地方では未だに無法者達が幅を利かせているって言うし、心配の種は尽きないわよね」

「なるほど、それで二人とも心配そうにしてたのか」

漸く得心がいったらしく、フィオがふむと頷く。

そうなのよ、とユーリーも言葉と共に溜め息を吐き出す。

時として魔物などの類よりも知恵が回る分人間の方がよっぽどたちが悪いし恐ろしく思える。特にそんな土地柄とあっては尚更だ。

「地精の御所は、その南方にあるの？」

「はい。南方連合の南東部に広がる大森林帯、その最奥部に御所があると言われています」

ユーリーの代わりにローエンが補足する。

一瞬の逡巡の後、フィオがうんと大きく頷いた。

「だからって行かない訳にはいかないもんね。まだ南方がどういうところかよく分からないけど、まあ何とかなるよ」

その樂觀さが羨ましい、とユーリーは心底思った。

“勇者”として地精の長に会いに行かねばならないのは解かるし、ユーリーだって自分の目的でそれに同行したいとたった今志願したばかりだ。

しかしそれとこれとは話が別と言うか。南方という土地の恐ろしさを聞いて育った身としては、やはり懸念の方が大きいのだ。

なかなか決心がつかず葛藤していると、それをここぞとばかりに鼻で笑う輩がいた。

無論デインガードである。

「そんなに行くのが怖いなら大人しく実家に帰りゃいいじゃねえか。別に義務って訳じゃねえんだしよ」

その言い方にユーリーはむっとした。

この青年は誰かしらに突っかからなければ気が済まないのだろうか。

「わたしにはわたしの事情があるのよ。そういう訳にはいかないの。簡単に言わないでよ！」

「ほー、だったら持ち前の強引さで無理矢理でもついてくりゃいいんじゃないの？ 怖えだなんだって言っただけでねえだよ」

「しょうがないでしょ？ 不安なものは不安なんだもの。貴方は南方のこと何も知らないからそんなこと言えるけど、あの土地の危険

さを知ったらそんなこと言えなくなるんだから」

「さあな。行ったことねえし？ 話に聞いただけでビビっちまうような臆病もんとは訳違うんで」

「幽霊を怖がってる人に言われたくないわね」

「ンだとコラ！！」

まさに売り言葉に買い言葉とはこのことか。

幼稚だと思いつつつい買ってしまったのも己の気の強さ故であろう。この青年の性格の捻くれ具合も相当なものだが。

息巻きかけた調子を落ち着かせ、再びディンガードが嘲笑を浮かべた。

「ふん、魔法もろくに使えねえくせに。どうせ足手まとい確定なんだから人の後ろに隠れてりやいいだけだろ？ いい身分だよな」

その言葉に、カツと頭に血が上る。さすがにそれは聞き捨てならなかった。

——何も知らないくせに！

「使えない訳じゃないわよ、失礼ね！！ 本当、貴方って口も性格も悪いわよね！ 親の顔が見てみたいわ！！」

怒りを露わに顔を背けた瞬間、つい反射的に火に油を注ぐような言葉が口を突いた。

あ、というフィオの短い声が^{じだ}耳朶に触れる。しまったと思った。ディンガードのことだ、きっと次の瞬間には

何倍もの応酬が返ってくるのだらう。

しかしこうなったらむしろ望むところである。そっちがその気ならこっちだって負けるつもりは微塵きじんも無い。

ユーリーは即座に来る罵詈雑言ばりぞごんに身構えた。

だが、待てどもデインガードが何かを言っただけで来る様子が無い。

おや、と思い、逸らしていた視線を彼の方へちらと向ける。

そこで視界に映ったものは怒りに身を震わせるデインガードの姿ではなく、どこか衝撃を受けたように眼を見張る彼の顔だった。

何、と訝しんだが、それが不意に歪み、浮かべられた暗い嘲笑にユーリーはぎくりとした。

「奇遇だな」

零れる冷たい声色が無性に不安感を掻き立てる。

「俺も是非拝んでみてえわ」

えっ、と声を上げるよりも早くデインガードが席を立つ。

先に宿に戻つてると言い捨てると、彼はそのまま振り返りもせず店を出て行った。

冷えた空気がその場に流れる。

一体何が起きたのだらう。予想とまるで違う状況にユーリーは戸惑いを隠せなかった。

ユーリーの知る限りデインガードは短気な性格だ。言われたらそれ以上に言い返してくるのが彼だと認識している。

それがこんな風に自嘲気味に相手の言葉を受け取るなんて思いも寄らないことだった。

「ねえ、わたし、何かまずいことを言った？」

思わず隣にいるフィオを見る。

フィオは複雑そうな表情を浮かべていた。

その様子がまた不安を煽^{あお}る。

フィオは暫く何かを言いあぐねるようにしていたが、ややあって重そうにその口を開いた。

「あんまりこういうこと言いふらすべきじゃないのかなって思うんだけど……」

「なに？ 何なの？」

「デイン、親がないんだ」

「えっ」

短く息を呑む。

「それって、亡くなってるってこと……？」

恐る恐る尋ねる。

だがフィオの首はふるふると横に振られた。

「オレの生まれる前のことだからよくは知らないんだけど……」

その口から、躊躇^{ためら}いがちに言葉が紡がれる。

「デインのお母さん、デインが五歳の時あいつを置いていなくなっ
てしまったんだって……」

その答えに、ユーリーは青玉の眼をいっぱいに見開いた。

3 - 3 : 遠い声

思い出せる限り父親は最初からいなかった。祖父がいたような気はするが、気付いた時には母親と二人きりだった。

顔はもう覚えていない。何せもう十八年も前のことだ。

母親の故郷へ行くと言われ、初めての遠出に胸を躍らせていたことは覚えている。

そして、自分を置いて去っていくその後姿も……

デインガードは宿の屋上の縁に身を預けながら、町の外に広がる荒野を見つめていた。

荒野から流れてくる乾いた風が頬を撫でる。

少し埃っぽい風を感じていると、耳の奥から色んな人間の声が蘇ってきた。

——音沙汰の一つもなしに久しぶりに帰ってきたと思えば、まさか子供を置いていくとは——

——どうせ惰性で生んだはいいが育てられなくて捨てに来たんだろ。最近の若い奴は本当にだらしがなくていかな——

——まったくです。うちはごみ捨て場じゃないんだから、ねえ？

——ロクトアさんの娘だからと甘くするからつけあがるんですよ

——それで、どうするんです？ この子——

——うちは引き取れませんよ。他の子もいるし、余計なお荷物抱えるほどの余裕は……——

——うちですよ——

——まったく、オーラめ。厄介事を持ち込みおつて——

子供には理解出来ないと高を括っていたのだろう。しかしディンガードには大人達の会話から自分の置かれた状況が嫌と言うほど理解出来た。

自分が母親に捨てられたこと。

自分が村人達に歓迎されていないこと。

疎ましく思われていること。

悲しくて、悔しくて、辛くて。大声で泣き喚きたかったのに、村の大人達の醸し出す空気がそれを許してくれなかった。

母親に置いていかれたショックも引かぬというのに、ディンガードは大人達があだこうだと擦り付け合なすいをする間に、ここでは誰にも頼れないということを悟らなくてはならなかった。

当然その後母親が姿を現すことなく、ディンガードは疎まれながらもそのままレカン村で育てられることになった。

——母親が母親なら子も子だな。愛想が無いったら——

——そんなだから親にも捨てられるんだろ——

——口答えするんじゃない！ 誰のお陰でこの村で暮らせていると思ってているんだ！——

叩きつけられる罵声。心無い声が奥底に響く。
無意識の内に俯き、強く拳を握り締めていた。

（うるせえよ……てめえらは何にもしてねえくせに、どいつもこいつも、勝手なことばっかほざきやがって）

脳裏を過ぎる声に心の中で悪態を吐きながら、そつと左手を開く。手の平の中には、紐を通された古びた指輪が握られていた。

手を傾けると指輪はころりと転がり、中央にはめ込まれた赤い寶石が鈍く光を反射する。

それは村に着く前に母親から渡された唯一の品だった。

家に古くから伝わるもので、子孫を守る先祖の祈りが込められている、とか何とかという曰くのあるものらしいが、詳しくは知らない。それを教えられる前に、当の母親は姿を消してしまったのだから。

自分をこんな状況に置いた母への恨みから捨ててしまおうと考えたことも一度や二度ではないが、その度に養母たるシビラはそれを諫めた。

シビラはフィオの実母であり、唯一自らディンガードを引き取りたいと申し出た人だ。

ディンガードの母親とは親しい友人だったらしく、引き取ることを村人からは反対を受けたが頑として聞かなかったらしい。

ディンガードがノークス家に引き取られたのはフィオが生まれる少し前のことだったが、彼が生まれてからも彼女とその夫は二人を分け隔てなく愛してくれた。

——ディン、お母さんのことを悪く思わないであげてちょうだい。オーラもきつとつらかったと思うの。かわいい自分の子供とお別れしなくちゃならなかったんだもの。わたしだったら、身を切られるよりも悲しいわ。大丈夫よ、きつといつかまた会えるわ——

彼女はいつもそう言って反発するディンガードを優しく諭した。

村人達に常に煙たがられ、心無い言葉を浴びせ掛けられてきた彼がそれでも村での生活を捨てなかったのはフィオと、何よりシビラの存在が大きい。

ノークス一家は周囲に見捨てられたデインガードにとって唯一心を許せる存在だった。

それこそ、家族と呼べるほどに。

手の平の指輪を、もう一度握り締めて視界から消す。

シビラの言葉こそ信じることは出来なかったが、親のことなど、とうの昔にどうでもいいと思うようになっていた。

自分にはシビラやフィオがいるのだから、自分を放り出した人間のことなんて忘れてしまえばいい。

村人達から散々に罵倒される女と自分はもう何の関係もない。そう思えば、自分の知らない誰かの悪口を聞かせられているだけなのだ。気が随分楽になった。

忘れてしまおう。記憶のずっとずっと奥底へ沈めてしまおう。はじめの思いと一緒に、全て。そうすることで、自分はオーラの息子ではなく、シビラの息子として、フィオの兄として、ノークス家のデインガードでいられた。

……だというのに。

——本当、貴方って口も性格も悪いわよね！ 親の顔が見てみたいわ——

（くそ……余計なこと思い出させやがって）

握った拳を額に当てながら呻く。

あの生意気女。強引についてきたと思えばこっちを好き勝手引つ掻き回して、更にはフィオまで危険な目に遭わせた。

その挙句人のトラウマまで引つ張り出してくるなど、無神経にも程がある。

（悪かったな、口も性格も悪くて。大体最初っから気に食わなかったんだよ、あいつ。馴れ馴れしいし。フィオも何であんな奴受け入れちまうんだか）

ふつつと沸き上がる憤り。ざらざらとささくれ立つ心。耳の奥に響く声がそれを更に煽ろうとする。

が、デインガードは大きく溜め息を吐き、頭を振ってそれらを振り払った。

「……くだんね」

これ以上考えていても気が滅入るばかりだし、あんな女の為に嫌な気分でのいるのもまた癪に障る。

こんなの、子供染みた感情だ。もう忘れよう。

思考を打ち切るとデインガードは指輪に通されている紐を首に掛けて服の中にしまい、階下の部屋へ戻ろうと踵かかひを返した。

その時だ。ばたんと派手な音を立てて建物内部へと繋がる扉が開いた。

驚きに眼を見張る。

中から出て来たのは、慌てた様子のユーリーだった。

3 - 4 : 胸に落ちてゆくもの

隠そうともせず舌打ちする。今一番顔を見たくない相手だというのに、嫌なタイミングだ。

そのまま無視して横を通り抜けようと決めて足を踏み出そうとすると、それより速く歩み寄ってきたユーリーが頭を下げると同時に叫ぶように言った。

「ごめんなさい!!」

……さすがに驚いて足を止めてしまう。

「……はあ？」

いきなりやって来て何を、と思ったが、それが先程のやり取りに向けての謝罪であるとすぐに気付く。

ユーリーはディンガードの反応に構わず頭を下げたまま一気に捲まくし立ててきた。

「さっきは酷いことを言ってしまったて本当にごめんなさい！　フィオから聞いてやっと知ったんだけど、貴方のこととかわたし全然知らなくて……カッとなってつい口を突いたこととはいえ、本当に失礼なことを言ってしまったと思うわ……」

次第に語調の弱まっていくユーリーを、しかしディンガードは白い目で見ていた。

他の連中と同じ反応だ。その謝罪が何の意味もなさず、ただ謝罪者の罪悪感を払拭する為だけのものであるということとはとくに知

っていた。

茶番だ、こんなもの。

「……別に。もう大昔の話だし、今更気にしてねえよ」

視線を逸らしながらそう口にする。

さつさとこの茶番を終わらせてこいつの元から去りたかった。

しかしこの少女はなかなかそれを許してくれない。

「そんなことないでしょう！？ 昔だとか、今だとか、そんなの関係無い筈だもの！ 気にならない訳がないじゃない！」

「お前には関係ないだろ。ほっとけよ」

苛々が募る。忘れようとしていた感情が掻き立てられ、溢れ出そうになる。

放っておいてほしかった。心底。今すぐこの場を離れたかった。

微かに震えだした拳が耐え難い衝動を訴える。

いつそ突き飛ばして振り払ってしまおうかという考えが脳裏を過ぎった瞬間、目の前の少女はまるでさせまいとするかのようにディンガードの服の裾に掴み掛かり、見上げるようにして更に言い募ってきた。

「放っておける訳ないでしょう！？ このまま引き下がったら貴方のお母様に申し訳が立たないもの……！」

「……………は？」

全く予測していなかった言葉に思わず間の抜けた声が口から飛び出す。

何、と聞き返す前に、ユーリーは構わず言葉を続けた。

「そうよね、いくら何でも自分の親が悪く言われたら気を悪くするのは当たり前よね。ディンガードの口と性格が悪いのは本人のせいなのに、お母様のせいにするのは良くないわよね」

はあ、と頬に手を当てて肩を落とすユーリーの姿からは、心底申し訳ないという気持ちが窺える。
が、ちよつと待て。

「……おい。何だそれは。謝罪、か……？」

「当たり前でしょう？ 貴方のお母様へ酷いことを言ってしまったのは謝るわ。本当にごめんなさい」

「いやいや、おかしくね？ 謝る相手、俺じゃねえの？」

「だから謝ってるじゃない。お母様ごめんなさいって」

「いや、だから、何か違くね？」

「なにが？」

……埒が明かない。

むしろ自分が何か勘違いを起こしているのだろうかと思ひ込んでしま
いそうになる。

思わず額に手を当てて眉間に皺を寄せていると、ふうという溜め
息の後にユーリーが再び口を開きだした。

「だって貴方の性格が悪いのは間違っていないでしょう？ 捻くれて

るし、意地悪だし。でもそういう風に育ったのは貴方なんだから、それを親御さんのせいにしてはいけないと思うのよね。何よりお母様に育てられた訳じゃないんだし」

実に新しい意見である。

というか何気に人のことを悪し^あ様に言っているのはどういう見だ？ そこへの謝罪は無しか、コラ。

「……あのなあ。普通は親に捨てられて不憫だとか、だから捻くれちまったんだとか、母親最悪だとか、そういう感想持つもんじゃねえのか？」

こういうことを自分で言うのがまた間が抜けているというか。言いながら俺は何をしているんだと自問したくなる。

しかし目の前の少女はそんなデインガードの思いも知らず、ものの見事に一蹴してくれる。

「え、なんで？ そりゃ、お母様の心情を思えば不憫だとは思っけど」

「だから何でそこで母親なんだよ！ てめえの子供捨てるような親だぞ！？」

さすがに堪えきれなくなつて声を荒げる。

だがユーリーは落ち着いた様子で言葉を返してきた。

「事情があつたんでしょう？ どういうものかは分からないけど、でも、どうしても貴方を手放さなきゃならなかった事情がお母様にはあつたんじゃないの？ だから、故郷の村に貴方を置いていったんでしょ？」

は、と一瞬息が止まる。

眼を瞬かせている間もユーリーは言葉を続けた。

「本当に貴方が要らなくて捨てたのなら、その辺の教会にでも預ければいいだけの話でしょう？ でも貴方のお母様はそうせずに、わざわざ故郷の村に出向いてまで貴方を預けに行った。それって、お母様が貴方のことを案じた証拠だわ。自分の故郷の人々ならよく知っているし、全く知らない人間に預けるよりはずっと安心なもの」

「……ハ……んな訳、あるかよ」

そんな筈は無い。そう突っ撥ねるように、ユーリーの言葉を嘲笑あざわらう。

けれどどういう訳か、上手く笑みを作ることが出来なかった。
歪いびつな笑みを浮かべたまま吐き捨てるように言う。

「……阿呆らしい。だったらどんな事情があつたっていうんだ？
てめえの息子ほつたらかして、何年も連絡一つ寄越さねえ。その間
てめえのせいで子供がどんな目に遭つてきたか知らねえでよ！」

語気が強まる。

抑えつけていた憤りが、怒りがドツと噴き出しては止まらない。

——最低な女だよ、お前の母親は。自分の子供の面倒すら見れないなんてさ——

声が聞こえる。またあの声。煩いくらいに。

耳の奥から押し寄せる声の波が、押し込めた筈の感情を引っ張り出してくる。

——あんな子だったなんて思わなかったわ。ほんと、常識を疑うわよね——

あの悔しさを、悲しさを、辛さを、苦しみを。

頭の中に響く声の渦が、溢れ出た感情を更に増長させていく。誰のせいだ？ この恨みは、憎しみは、誰へのものだ！？

——かわいそうにねえ。親がまともだったらもつと幸せな人生送れただろうに——

「それでも、自分の親を悪く言われたら、子供は悲しいと思うわ」

心のはじけたと思った瞬間、まるで爆発しかけた感情を抑えるように、ユーリーの言葉が心に落ちた。

吸いかけた息が止まる。

あんなに煩く響いていた声が、その時を境にぴたりと止んだ。

落ちていたユーリーの声だけが耳朶じだに触れる。

「貴方にとっては、確かに酷い親なのかもしれない。お母様のせいで沢山辛酸を舐めてきたのかもしれない。それでも、他人が貴方のお母様を悪く言って、貴方が喜ぶ通りがどこにあるの？ ねえ、デインガード。貴方だってお母様が貴方に辛い思いをさせる為だけに村へ置いていったなんて思っていないでしょう？ だから今も形見の指輪を大切に持っているのではないの？」

「！ お前、何で指輪のことを……」

「フィオから聞いたのよ。貴方がお母様から預かった品を、失くさないよう今でも肌身離さず持ち歩いてるって。それって、貴方がお

母様のこと、ちゃんと大切に思ってるって証拠よね？」

「そんなんじゃないよ。ただ、シビラさんに……フィオの小母さんに大事に持ってるって言われたからで……」

「本当に嫌悪しているなら、恨んでいるなら、とつくに捨ててるんじゃない？ 小母様からの忠告なんて無視して。それを言い訳にしているだけなんじゃない？」

「っ！ 何でお前にそんなこと解かんだよ！！ 勝手な推測で物を言うな！！」

「まあ、それを言われると弱いんだけど」

「やっぱり憶測なんじゃないか！！ 何なんだよお前！？」

「でも、当たり前でしょう？」

「！！……っ！」

二の句が次げない。言い返してやろうと思うのに、違うとさえ口に出来なかった。

ユーリーはふう、と息を吐き出し、一瞬俯いた後少しだけ笑みを作って言葉を続ける。

「わたしもね、実はちょっとだけ自分の母親が苦手なの。何ていうか、色々勝手な人で……苦痛に感じることも無い訳じゃなかった。でもそれで母親が嫌いかって言われたら違うって言えるし、他人から理解の無い親ねって言われたらきつと反発する。貴方なんかうちの親の何が解かるのって。嫌いとか、憎いとか、そういう簡単に

言えるような感情じゃないのよね。とても複雑で……だからこそ、誰かに踏み入れたくない。勝手なことを言われたくない。……ディングガードも、そうなんじゃない？」

「そうなんじゃ、って言われても……俺は……」

答えに詰まる。

そんな風に考えたことなんてなかったし、大体自分はずっと母親を恨みがましく思っていた筈で……

——ディン、お母さんのことを悪く思わないであげて。あなたの為にも——

不意に、シビラの言葉が蘇る。

——お母さん、いなくなってしまうって悲しいね。大好きなんなんね。だから、悪くだなんて思っではいけないわ。自分の言葉で自分を傷つけてはだめよ——

好き？ あの母親を？ そんな筈は無い。あんな女、どうだって

……

……なら、どうして、こんなに苛々するのだろう？

どうしてこんなに、苦しくなるんだ？

どうでもいい筈なのに、無視すれば良いのに、いつだって彼女に関する言葉を看過できなかったのは……

「……違う。そうなんじゃ、ない……」

不意に声が零れた。

認めたくない。認められない。そんなもの。

だって認めてしまつたら、それは……

すると傍で大きな溜め息が洩れるのが聞こえた。

いつの間にか落ちていた視線を上げると、ユーリーが呆れた様子でこちらを見ていた。

「ほんと、貴方つてば素直じゃないのね」

けれどそう言う彼女の顔には微笑が浮かんでいる。

「そりゃあ、長年積み重なったわだかまりがすぐに無くなるとは思わないけど……いい機会だと思って、お母様のこと、少しずつ見直してあげたらどう？ きつとその方が貴方の気持ちも楽になると思うわ」

まあ、わたしもあまり人のことは言えないんだけど、と彼女は笑うと、そつとディンガードの手を両手で取ってきた。

左手を包む温かい感触が、胸の中にまで沁みてくるようだった。

「何だかすっかり話がそれちゃったけど、わたしが謝りたかったのはそういうこと。酷いことを言ってしまったてごめんなさい」

本当に、どうしてこうなったのかディンガードにもさっぱり解からなかったが。

しかしユーリーのその表情を見ていたら、何だかもう何もかもがどうでもよく思えた。

あれほど昂^{たかぶ}っていた気持ちはすっかり収まり、未だ戸惑いは内にあるけれど、心は不思議と凪いでいた。

「……お前、ほんと変な奴だな」

自分勝手に横暴で無神経な奴かと思えば、失言に対して真剣に謝罪を述べてくる。

あれだけ苛立たしく思っていた筈なのに、今ではこうして手を握られていることもそんなに嫌な気がしない。
変な女だ。

思わず口を突いた言葉を真正面から受け取ったのか、途端にユーリーが唇を尖らせる。

「むっ、真面目に謝ってる人間にそういうこと言う？ 貴方ってほんと口が悪いわね」

「悪かったな、そういう風に育っちゃったもんで」

パツとユーリーの手を振り解き、一瞥もくねずに横をすり抜ける。
もう！ と不機嫌そうな声を上げるユーリーを背に、ディンガードの口からふっと笑みが零れ落ちた。

（ほんと、変な女だ）

追いかけてくる足音を聞きながら、ディンガードは胸の奥に温かいものが満ちていくのを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015t/>

HERO

2012年1月12日17時45分発行